
天元突破グレンラガン番外編 第5 . 5 5 話「前を向いて生きやがれ！」

納 平子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天元突破グレンラガン番外編 第5・55話「前を向いて生きやがれ！」

【Nコード】

N5779F

【作者名】

納 平子

【あらすじ】

アダイ村を出て幾日か。仲間と離れ、生き倒れ間近な不撓不屈の鬼リーダー・カミナは、獣人に追われる一人の少年と出会う。少年を助けたカミナは彼の住む村へと招待されるが……。天元突破グレンラガンで人気の高いアニキを主役に据えた物語です。作者視点で描かれたカミナの生き様を、どうぞご覧ください。

始まりやがれ！（前書き）

始まるぞ「ラア」！

始まりやがれ！

これは、天も次元も突き破る、荒唐無稽の規格外、しかし、誰よりも熱く燃えたぎる魂^{ソウル}を宿した、通称穴掘りシモン、

…の、兄貴分である不撓不屈の鬼リーダー・カミナの、壮絶にして壮観なる物語を綴ったものである。

第5・55話 前を向いて生きやがれ！

何処を向いても見渡す限り、砂礫が覆う荒野の世界。

草木もろくに生えない過酷な土地で、人っ子一人見当たらない侘しい場所で、

「……だーれもいねえ」

その男、カミナは存在した。

無機質な荒野には似合わない巨大な顔に手足を付けた人型の機械

通称“ガンメン”、機体名『グレン』の頭部に、腰をど
っかり下ろして腕を組む。日光を反射するグラサンと、グレンの紅
いボディが少々眩しい。

彼は獣人討伐隊『グレン団』のリーダーである。

獣人とは、地上を支配する生き物で、人と獣が合わさったかのような容姿を持つ。彼らは、地下世界で暮らす人間達が地上へ出てくると、ガンメンに乗って『狩り』をする。

地上に憧れ、地下を這い出してきたカミナとその弟分シモンも、例外なく、獣人達の手荒い歓迎を受けた。

だが、カミナはやらねばなしで引き下がるような男ではない。敵獣人の乗るガンメンを無理矢理奪って、我が物にしてしまう。

そして敵の本拠地を知った彼は、故郷のジーハ村で不良集団だったグレン団を獣人討伐隊と改め、攻められるだけの現状を打破しようと敵地へ攻め込む旅へ出たのだった。

旅立ったのだ。

旅をしていた、のだが。

「……………誰も、いねえ」

彼は現在、独りぼっち。

荒野の中心で孤独を眩き、グレン団の仲間の姿は影も形もない。

亡き父の形見である、燃え上がる炎とサングラスを掛けたドクロが印象的な柄のマントも、心なしかくすぶり気味。青色の髪と共に、風に吹かれてなびいている。

そう、単刀直入に言うならば、カミナは迷子に、

「あいつらどこに行きやがったんだ。まったく、揃いも揃って迷子たあ情けねえ！」

…彼は、迷子に、

「ちょっとばかり用を足しに行つて戻つて来てみりゃ、誰もいないんだからよ。しっかりしろつてんだよなあ」

………彼“が”、迷

「良い歳こいてはぐれるたあよ、やつぱ俺様がついてなきやあ駄目駄目だな！ ……迷子のー、迷子のオ仔猫ちゃん。あなたのお家はー、何処ですかあゝつと」

………。

……彼は、迷子になった仲間達を、捜している、途中でした（棒読み）。

そんなこんなで。

照りつける陽射しもなんのその、カミナは失踪した仲間達を捜すべく、荒野をさ迷っていましたとさ。

完。

始まりやがれ！（後書き）

終わっちまうのか？！

喰わせやがれ！（前書き）

喰っちまっぞコラア！

喰わせやがれ！

はい、始まって数分足らずで終わってしまいました。が、如何だったでしょうか？

…短いですね。短いです。アノ方もご立腹ですよ。

「オウオウ！ 男の生き様語るやいなや、いきなり終わるたあ何事だ？！ いいか、俺様の武勇伝はまだまだこれからだあ！ 良いから目んたまかっぼじって、よおーく見届けやがれ！！」

だ、そうです。

このままだと収まりがつかそうにないので、もうしばらくお付き合
い下さいます。

そんなこんなで。

故郷の村で悪名を轟かせていた（と豪語する）カミナは、仲間達を

捜して荒野をさ迷うこと一時間。

「……………腹、減った」

飢えで、半ば死にかけていた。

グレンは硬い地にひれ伏して、コックピットから這い出たカミナも同様に倒れてしまう。

人間腹が減っていると、気合いも入らなくなるものだ。視界がボヤけていく中、カミナの胸中には走馬灯のように、過去の出来事が思い起こされていた。

故郷、ジーハ村でブタモグラに乗り、悪人シャク村長を撃退して英雄ともてはやされた栄光の日々…（嘘）。

天井から現れたガンメン・ゴズーと美少女スナイパー・ヨコとの出逢い、弟分シモンとヨココの三人＋ブータの一匹でゴズーを撃破、そのまま地上へ出た時の感動……。

獣だか人だか判らない獣人からガンメンを奪い、戦いに勝ち意気揚々としながらも、直後に父親がすでに死んでいたことを知った時の哀しみ……。

人か獣か曖昧野郎との決闘、決戦を経て、シモンの乗るガンメン・ラガンとグレンが合体、顔が二つに増えた時のあの満足感……
(?)。

黒の兄弟との遭遇、顔十六のガンメンを目にし、その顔の多さに正直羨んだ、あの悔しさ……………（??）。

ガンメンを神として崇め、村の人口が五十を過ぎるとクジで村人を間引いていた、アダイ村の村長マギンのあのアゴのデカさ……………（????）。

「あ……………」

嗚呼　、素晴らしきかな我が人生…。天上天下唯我独尊の鬼リ―ダー・カミナの生涯に、もはや一片の悔いもなし……………。

「……………ん？」

あばよ、シモン……俺はもう駄目だ……、せめてお前だけでも、天を
衝いて、衝いて、衝きまくってくれ……。

「んー？」

嗚呼、だけだよ……心残りがあるとすれば、そりゃあの時食った
肉の味……結局、あの後シモンの奴食わせてくれなかったから
なあ……チクシヨウ、腹ア減ったぜ……また、あの肉を、味
わいたかった、な……。

「……………あ」

俺は、もう……逝、くぜ……………、

……………。

「……………あア

ツツツ！！！？」

く、場の状況説明しよか。

えゝ……………走馬灯が見え、瀕死寸前だったカミナの目に、高速で移動する二つの影が写った。それは一方がもう一方を追い掛けているようにも見

「がつぶウウウウウウウ！！！」

「ギジャア
?!？」

だからちよつと待てって！！一体何に噛みついたの?! 少しは落ち着けよッ、節操ねえなあおい!!!!

「ガウガウガウガウガウガウガウツツ」

「イだだだだ?!? 痛い痛い痛い痛い痛い痛い、イータータータータ!!!!」

……。簡単に、言つと、

飢えきつたカミナは通り掛かった蛇のような生き物に噛みつき欲望のままにむしゃぶりついて蛇のような生き物は痛そうだけどそんなの関係ねえとむしゃぶり蛇のような生き物は全身歯形だらけで結構痛そうでもカミナはもうやめないやめられない止まらない。

蛇のような生き物の断末魔だけが、虚しく荒野に残響しましたとき。

「……シャ ツ！！ 何なんシャア、お前は！！」

拘束され、滅茶苦茶に貪られる蛇のような生き物は激怒して叫ぶ。

するとカミナは、

「オウオウオウオウ！！ 迷子を捜して三千里、食い物見つけてお

おはしゃぎい！ 腹が減っては戦はできぬウ！？ 喰わなきゃ野垂れて死んじまわあ！！ 絶命寸前のカミナ様たあ、俺のことだあ！！！！」

「絶命寸前って、とてもそんな風には見えないっシャッ」

「頂きます」

カプッ。

「……ジャギアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

○

『食事』は、程なくして終わりを迎えた。

獲物が命からがら逃げ出したので。

「だぁチクシヨオイ！！ 何処行きやがった俺の肉ウ！？」

食い意地の張ったカミナは地団駄を踏んでそこらを見渡すが、蛇のような生き物の姿はもう何処にもない。

見事に獲物を逃したことで完全脱力、地べたにへたりと座り込んでしまう。

「くぅ。俺の、肉……」

「……」

へたれて動かないカミナは、一向に気づく気配がない。

高速で移動していた影は“二つ”あったことを。

蛇のような生き物の他に、もう一人この場にいることを。

「…あの」

「んあ？」

声がして。

うつむいた顔を上げると、そこには一人の少年が立っていた。

蛇のような生き物に追われ、カミナの奇想天外行動で助かった、少年。

背は低く、やつれ、ボロ布のような黒色の服を着た、白髪の、少年。

生気のない目で自分を見下ろす少年に、カミナは、逆から差す陽光で陰った顔を、まじまじと見つめて、

その少年が人間であることを、その目でしっかりと確かめて、

力強さを取り戻した声で、

一言。

「……俺の、肉………」！

違
う
っ
て。

…。

「…シャ、酷い目にあったシャア」

カミナと少年がいる場所から程遠い位置にある、岩場の物影。

そこに身を隠し、餓えたケダモノが追ってこないかしきりに確認してびくついている、蛇の獣人ダシャーがいた。

「痛ウゝ……容赦なく噛みつきやがって、人間めゝ。次に会ったらただじゃおかないっシャー」

憎々しげに呟く。

のだが、そうは言うものの、ダシャーの顔からは恐怖の色が消えていない。単なる虚勢のようだった。

食肉として見られ、本気で喰われかけたせいか若干トラウマになりつつ、何度も何度も来た道を確認して、

凶悪な人間・カミナは追ってこないと判断。ひとまずは安心し、近場に置いてきたガンメンに戻って出直そうと岩場から動く。

「しっかし……」

少し歩いて。

「直に捕まえてみようと思ったけどシャア、結局失敗したし、またいつも通り攻めようかシャア」

歯形の傷を労りながらダシャーはぼやく。カミナが割り込んでくる前、捕まえようとした少年を思い出して、

ぶるりと、

身震いする。

「薄気味悪いつたらないシャー。あの人間も、あの村も、これで終わりにしたいシャー……………」

喰わせやがれ！（後書き）

喰えなかった…。

忘れちまうだあ！？（前書き）

忘れるかよ！

忘れちまうだぁ!?

蒼穹際立つ、だだっ広い黄土色の世界の真ん中。

そこに立ち往生して動かない、とある一団の姿がある。

「
… アニキ、見つからないね」

人一人分乗れる程度の小柄なガンメン・ラガンに乗って、仰向けで空を見上げるドングリ目の少年シモンは、疲れたように溜め息をついて、

「見つからないわね、あの馬鹿は」

隣で背中を預ける少女、赤髪のポニーテールにナイスバディな身体
のヨーコは、神妙な表情で口を尖らせ、

「はぐれてからもう一時間以上経ちます。辺り一帯を捜し回って見つからないとなると、最悪、もう出会えない可能性も…」

さらに隣、難しい顔のデコ助ロシウは、現実的に悲観的で、

「まいごー、まいごー!」

「まいご…?」

倒したガンメンを元に造られた移動式司令部兼住居・グレンハウス、その屋根の上ではしゃぐギミーと首を傾げるダリーの双子は、状況を一切把握せず、

「大丈夫じゃない? カミナのことだし、野生の勘とかですぐ合流してくるわよ…っ」と

オカマで変態なメカニック・リーロンは、ハウスの窓辺に腰掛け、上の空で機械を弄って、

総じて、獣人討伐隊『グレン団』の面々だった。

…言うまでもないが、けっして迷子は彼らの方ではない。事実無根である。

で、実際に迷子になっているカミナを捜す一向なのだが。

「野生の勘、ね。ただの行き当たりばつたりのような気もするけど」

ヨーコの言葉は辛辣で、ラガン上のシモンもうんうん頷く。自分達のリーダーが行方不明なのにも関わらず、あまり心配はしていない様子。

薄情にも見える光景だが、それは言い換えれば、カミナに対する信頼が大変厚いことを示している訳で。

グレン団に合流して日が浅く、実直なロシウだけが彼の身を案じていた。

「敵に襲われているかも知れませんが、動けなくなっているかも知れない。やっぱり、一刻も早く見つけないと……」

なんて意見を出しても、

「大丈夫だよ。アニキはそんなやわじゃないから」

「殺したってまず死なないわよ」

というような返しがあるだけ。

……投げやりな感が否めないのは、気のせいです。

「不幸中の幸いだったのは、グレンも一緒にいなくなっただけでいい。敵ガンメンに遭遇しても、カミナなら上手く戦い仰せられるよ……」

熱心に機械を操作するリーロンもこの樂天ぶり。

不服ながら、一人だけ騒いでも仕方ないので、ロシウは引き下がることとなる。

なので、カミナとは後で合流出来るとして、その間グレン団はどうするか、という話題になり、

そんな折、グレンハウスからもう一人の（否、一匹の）仲間がある物を持って飛び出してきたので皆注目。

その仲間はラガンコックピットのシモンの懐へ勢いよく飛び込むと、手荷物を掲げて元気に鳴いた。

「ぶー！　ぶいぶい、ぶぶうー！」

ブタモグラの子供でグレン団の非常食……兼、マスコットの存在のブータだった。

「ブータ、何処へ行つて……それ、アニキの刀？」

シモンの腹に乗った小さなブータが掲げるのは、元はジーハ村の村長シャクが所有、後々にカミナが強奪して我が物にした刀。

それをシモンの上に置いて、自分の鼻と交互に指差してジェスチャーする。

「ぶい、ぶぶぶい、ぶぶぶいー！」

「…もしかして、刀の匂いでアニキを捜せるの？」

「ぶい！」

「へえ、ブータやるじゃない。後回しにするって決めた矢先に手掛かりね。どうする、シモン？」

横からヨーコも覗き込んで感心深げに眺め、今後の方針を聞く。

リーダー不在の今、臨時として指揮を取るシモンの答えは、

「じゃあ、アニキのところまで道案内を頼むよ。ブータに任せた！」

「ぶい！！！」

頼りになる仲間に託し、ブータは胸を叩いて任せろと意思表示。

刀の匂いを嗅ぎ、次に空をクンクン嗅いで、

ぶいっと、北東を指差した。

「あつちか。それじゃあ移動しよう。グレンハウスはラガンで引つ張るから、皆は」

「あ、私もラガンに乗せてくれる？ あつちは揺れが酷いし」

「良いよ。ロシウは？」

「僕は家の方に入ります。ギミー、ダリー、屋根から降りておいで」

「はい！」

「はい」

行き先も決まり、全員が移動する為に動いていく。

その中で、唯一輪に加わらない人物が一人。

「うん」

「…リーロン？ 聴いてたの？ 今からカミナ捜しに行くわよ」

気づいたヨーコが、ラガンから身を乗り出してリーロンに問いかけた。

彼（彼女…？）は、手のひらの丸いレーダーのような機械から目を見話さずに受け答える。

「ああ、オツケーオツケー。出発してちょうだい」

「さっきから何弄ってんの？」

気になっていたので、さらにヨークは質問。

「ちょーっと、気に入らないのよねー。ま、グレンの方で確かめてみないことには…」

リーロンは言葉を濁し、後で教えてあげる　とウィンク。

グレンハウスに取り付けた鋼鉄性の紐を引っ張りラガン発進、ガタゴト揺れながら、リーロンは険しい表情で思案を続けた。

「…………おかしいわ。やっぱり帰投ポイントがズレてる…………どうなっているのかしらねえ……」

一方、迷子のカミナは。

「腹減った…………まだ着かないのか、お前の村は？」

「…こつち。もう少し歩けば着く」

（結果的に）助けた少年の案内で、近くの村まで連れていってもらっていた。

カミナはグレンに乗り、弱々しくも気合いを出して（ガンメンを動かすには気合いが必要、メカニズムは現在不明）先頭に行く白髪の少年の後を追う。

時折、少年の名を何度も呼んで急かす。

「なあゝ、まだかゝ。俺の肉ゝ」

だから違つて。

「…」

少年は否定するどころか無反応。

話の噛み合わない（意思の疎通が出来ていない）やり取りが続く。

が、それも数分後。

「…シキロ」

「あん？」

少年はぼそぼそと、自分の名を明かした。

抑揚のない、平坦な声で。

「名前。シキロ」

たったそれだけ。

振り返りもせず、歩き続けながら話す。

カミナは、シキロの素っ気ない態度には無頓着でふーんと頷き、

コホン、と咳払い。

お決まりの見栄を切ろうと、グレンのコックピットから身を乗り出して、

「そんじゃ、俺も名乗らせてもらおうか。：オウオウオウオウ！！
天下広しにのさばる敵を、根こそぎ倒しやあ闊歩してエ、目指す
は夜空の満月よオ！！ グレン団のカミナ様たあ、俺の」

「聞いてない」

拒否された。

「……………聞けよ」

少しイジけ気味なカミナ。

シキロはやはり無表情で喋る。

「覚えないし、すぐ忘れる」

「ああ？」

挑発とも取れる発言に、カミナの表情も少し険しいものに。

それを察してかどうなのか、シキ口はすぐに違つ、と言い直した。

「あなたはボクをすぐに忘れる。顔も、声も、名前も、形も、ボク
の存在そのものを忘れる。だから、あなたの名前も聞く必要ない」

短い付き合いだから、とかではなく、絶対に忘れる、と断言。

必要ない。どうせ、忘れる、と。

「…必要が無いだあ？ お前が名乗っという俺だけ名乗らねえ道理
はねえだろうが」

明らかに拒絶されているのに、しかしカミナは引き下がらなかった。

人の意見なんて知ったことか！ と、自分の主義主張を頑として曲げないのがこの男。

長所と短所が紙一重な性格だが、本人は無自覚なので仕方なく、カミナは改めて名乗る。

「良いから聞きやがれよ。俺様の名前はカミナだ、カ・ミ・ナ。忘れんじゃねえぞ、俺もお前の名前を忘れねえからな、シ……」

ニカツと笑い、シキロの名を呼ぼうとして、

直前で、詰まった。

「……？」

シキロが不審げに振り返ると、そこには滝のように汗を流す鬼リィーダーの姿が。

言った傍から忘れていた。

「シ……シー……シ、イイ………る?」

「……………」

シキロの視線が刺さる。

カミナは必死で頭の中を掘り起こして、

掘って、掘って、掘りまくって、

途中、掘るのはシモンの専売特許だ、俺の得意分野じゃねえ。けどな、漢^{おとこ}にはやらなきゃならねえ時つてもんがアアアアと諦め悪く、でもやっぱり思い出せないものは思い出せない訳でして、

最終的に。

「.....シロツケ！」

ズビシッと指差し、ありったけの気力を振り絞って間違えてるって。

「.....」

シロツケの表情は固い。永久凍土の眼差しで見上げる。

見上げて、

「.....」

「アあ？」

何も言わずに回れ右、カミナに倣って前方を指差した。

反射的にカミナも前を向くと、遠方に起伏の富んだ地形が見える。

洞穴が点在し、そこを居住地としているらしい複数の人影がちらほら。

どうやら村に着いたようだった。

「おお、あれがシロツケの村か！ よっしゃ、飯喰うぞオ
ー！！」

名前を間違えたままのカミナはコックピットに戻り、喜び勇んで走って行ってしまった。

その場に残されて、遠ざかる紅色の背中を眼で追うシキ口は、しばらくの間立ち尽くす。

「……………ようこそ、旅人さん」

誰にも聴こえない声で、教えてもらった名は口にせず、虚ろなままに、言う。

「誰から必要とされない、存在する価値の無い、シナチ力村へ…」

ようこそ ……と。

忘れちまうだあ！？（後書き）

忘れてねーからな！？

辛気臭エ！！（前書き）

臭すぎる！

辛気臭エ！！

シナチ力村では、初めての来訪者となるカミナを大いに歓迎して、盛大なご馳走が振る舞われた。

という都合の良い展開には、勿論、ならなかった。

「……なんだろうな。妙な既視感を感じるんだが」

洞穴の内の一つ、窮屈とまではいかなくとも、屈まなければ入れそうにない空間。そこに招かれ、期待に胸膨らませたカミナの前に運ばれたのは、読んで字の如く『質素』なおもてなしの数々。

それでは、本日の献立をご紹介します。

- ・しなびたパン（一口サイズ）
- ・水（濁り六割増量中）

・ヤセホソリサカナダカナンダカ（骨だけの魚）

「……………」

とっても美味しそうですね。では皆さん、両手を合わせて、

頂きます。

「喰らう!」

パンを一口で食べて、

「飲む!」

水をがぶ飲みして（濁りなんて気にしない）、

「再び喰らうッ！！」

ヤセホソリサカナダカナンダカを口に放り、バリバリ噛んで胃袋に流し込んで、

「ごっそーさん！！！」

両手を合わせて一礼、ご馳走様でした。

経過時間、三秒余り。自己新記録を塗り替えた。

それでは感想、逝ってみよう。

「……………足りるッッッくあああああああああああ？
！！」

怒りのマグマが大噴火した。

ちやぶ台代わりに石製の台を、これでもかというくらい豪快にひっくり返す。

こらえようのない怒りは全身を駆け巡って、八つ当たり気味に、隅で正座して眺めるシキ口を睨んで思いの丈をぶつける。

「なんなんだこれ！ アダイ村の再来か！？ もう少ししたら、アゴが立派な村長が現れてム力ついた口上を垂れ流すのか？ ああ！
」

むしろ期待しているような言い方だが、シキ口の表情は崩れない。

端的に、怒れる猛獣に言い渡す。

「それがこの村の最大限の食料だから、文句があるなら食べないで」

正論だった。

命の恩人への応対としては、どうかとは思っけど。

痛い所を突かれ、カミナはぐうの音も出ない。渋い顔で胡座を掻く。不満はまだ残っているものの、ひとまず空腹ではなくなったので、そこところは眼を瞑ることにする。

こちらもまた、ふてぶてしいことこの上なかった。

「ま、飯は百歩譲って良いとしてもよ」

食事後。

一息入れてくつろぐカミナは、頬杖をついてざっと洞穴の中を見回した。

シキロ以外の村の住人、それらの顔をジト目で見て、不機嫌そうに愚痴を溢す。

「この村の辛気臭さはどうにかならねーのかよ。揃いも揃ってカビが生えたようなツラしやがって、余計飯が不味く感じたぜ」

カミナの機嫌を損ねているもの、それは。

「
…」

「
…」

「
…」

シナチ力村の人間、その誰もが“死人に近く、または死人と同じような顔をしている”ということ。

客人の接待に当たるシキロも似たようなものだが、こちらはその上を行く死に顔で、

眼の焦点も定かでなく、頬は痩け、白髪でない人間は一人もない。

初の来訪者カミナが近づいても、

「……」

ご覧の有り様で、返されるものはなし。誰一人として人間らしい感情をあらわにしたことがない。

常人なら裸足で逃げ出したくなる、気味の悪い様相だ。カミナ自身も逃げはしないが、どうにも気に入らなくて虫の居所が悪くなる。

例えるなら、生きているのに死んでいるような。

活動しているのに停止している、という感覚。

いくら無茶を通して道理を蹴っ飛ばすカミナでも、この矛盾を良しとすることは出来そうになかった。

「…気に入らねえ。これなら、アダイ村の連中の方がまだマシだ。あっちにや生きようって意志があったからな」

フンツと鼻を鳴らし、カミナは思い出す。シナチカ村の前に寄った地下の村、アダイ村を。

あそこも食料、生活環境が芳しくなく、住人が五十を越えると村を出て、危険な地上へいかなければならなかった。

苦渋の選択。地上へ出れば命がないことを知っていた村長マギンの、考え抜いた末の、最良の方法。

村人全員が生き延びていく為の、苦肉の策だ。

全ては、生きる為。

「　　けどよ、この村はなんだ？　全員死に面晒して、生きることを諦めちまったみてーだ。どうすりゃこんな風になるんだよ」

似たような環境、境遇を持つアダイ村とシナチ力村。二つの村の違いである、生きることへの欲求の有無。

シナチ力村の人間は、どうして生に執着しないのか。

どうして、こんなにも生きることに関心がないのか。

唯一まともに話せるシキロは、

「捨てられたから」

事もなげに、語った。

悲哀も、悲壮もなしに。

ただ、淡々と。

他人事のように。

話す。

シナチカ村の、過去を。

…
昔々、あるところに、とても裕福な地下の村がありました。

そこでは食料となる家畜も飲み水も豊富にあり、力ある一部の村人達が独占していました。

力なき他の村人達は、力ある村人達に従う他なく、奴隷として、生きる日々を送りました。

そんなある日、村で度々起きていた地震の内、一際大きな揺れが村を襲いました。

落盤で死ぬ者もいましたが、被害は比較的少ないものでした。

村人達は喜び、安堵して、誰一人気づきませんでした。

本当の被害が、後からやってこようとしていることを。

地震が起きた翌日、村の端の壁が崩れて、隣にあった村と繋がりました。

隣村は天井が崩れたらしく、村人は無惨にも押し潰され、全てが生き絶えていました。

無事だった村人、特に力ある村人達は哀れにも思わず、弔いもせず
に放置しました。

それがいけなかったのでしょうか。やがて死体は腐り、空気は滞って、
病魔となって村を襲いました。

ですが、村人は何故か無事でした。人の身体に害を与えるものでは
なかったのです。代わりに、

病魔の餌食になったのは、飼われていた家畜の方。

豊富にあった家畜は次々に病死して、村は飢饉に見舞われました。

村の非常事態に力ある村人達は困り、力なき村人達もどうなること
か不安を抱きます。

そして、力ある村人達は長く話し合い、出した解決策は、

生き残りの家畜の数に合わせ、力なき村人達を村から追放。

隣村の天井に空いた穴から、地上へ追い出すというものでした。

話し合いが終わると早速、力なき村人達の中から役に立ちそうになり者達を選別し、地上へと連れ出しました。

穴のある場所から離れた場所まで行き、力ある村人達は追放された村人達へ言います。『お前達はもう要らん。此处で好き勝手生きて、

好き勝手野垂れ死ね。忠告しておくが、村に戻ってこようなんて考えるな。お前達の居場所は、村にはもう無いんだ。戻ってきたら、容赦しないからな』

こうして力ある村人達は食糧難を脱して、

力なき村人、加えて追い出された村人達は、何もない場所で途方に暮れたのでしたとき。

めでたし、めでたし。

.....。

「……………」

ちつともめでたくなかった。

話を聞いている間も、聞き終えた後も、カミナの表情は暗いまま、
険悪さを増していくばかり。

対称的に、当事者であるシキロや他の村人達は顔色を変えず、無味
乾燥した表情のまま。

それがまた、一層カミナの怒りに拍車を掛けることになった。

「…で、お前らは全員絶望して、生きることを諦めたと。馬ッ鹿馬
鹿しいったらねえなあ、そんなもん気にしなけりゃ良いじゃねーか」

「
…」

カミナの叱咤激励にも、村人達は無言。

めげずに説教するが、

「むしろ、村ア仕切ってる連中から解放されたって思えや良いんだよ！ それでそいつらの言う通り、好きに生きやがれってんだ」

「
…」

「……………聞いてんのかよ、おい」

「
…」

誰からも反応は返らず、カミナは一人、空回り。

誰も彼もが人形さながらな様子に、孤高の燃える男は。

「……………シロツケェ!!」

名前間違えてるって。

「んなこたあどうだって良いんだよ！ シロツケ、テメーらが前に住んでた村は何処にある!?!」

語りの文に突っ込みつつ、カミナはシキロに詰め寄った。

鬼のような形相で、顔面直前まで近づいて怒鳴り、

「聞いて、どうするの？」

それでも動じないシキロが問い返すと、カミナは鬼の形相を少しだけ和らげた。

「決まってるだろうが…」

不敵に、不遜な笑みを浮かべて、

ビツと、親指を立てて自身を差した。

「このカミナ様が、直々に文句を言いに行つてやるんだよ」

辛気臭エ！！（後書き）

臭いの元を絶つてやらあ！！

どうすんだ？（前書き）

どうすんだ？

どうすんだ？

カミナという男が、現れた。

「何故かボクを助けてくれたね」

腹が減っているから飯をくれと、頼まれた。

「何故、ボクに頼むんだろっね」

村へ案内する途中、何度もボクを肉扱いした。

「滑稽だね」

仕方ないから、名前を教えた。

「無駄なのにね」

即座に忘れられた挙げ句、間違えられた。

「滑稽だね」

あの人も、名前を覚えてくれた。

「無駄なのにね」

少し、揺らいだ。

「…」

村に到着して、あの人は広場で演説みたいなことをした。

「皆聞くわけないのに、哀れだったね」

ちよつと不機嫌気味にボクのところに戻ってきて、愚痴を溢した。

「良い迷惑だね」

少し、戸惑った。

「…」

村で出来る限りのおもてなしをした。

「そんな義理、ないのにね」

一応、あるけれど。

「助けてなんて、言ってないし」

助ける必要、なかったし

「助ける必要、なかったし」

あの人は食事を終えると、また愚痴を溢した。

「厚かましいにも程があるね」

村のことを、聞いてきた。

「答える義理も、ないけどね」

ボクは、教えてあげた。

「
…」

話し終えると、あの人は怒っていた。

「
なんでだろうね」

前の村の人達にも、シナチ力村の人達にも、凄く憤っていた。

「
なんの関係もないのにね」

シナチ力村の人達を、説教した。

「
だから無駄なのにね」

説教を聞き入れて貰えなかったから、前の村の人達に文句言ってるって、言い出した。

「何様なんだろうね」

前の村が何処にあるのか、聞かれた。

「答える義理は」

答えた。

「…」

なんだか、酷く懐かしかった。

「
…」

ボクは、あの人のことを、あの人は、ボクのことを、

もしかしたら …、

「ねえ、シキ口。何を期待しているの？」

…。

「淡い希望なんて持ったら駄目だよ。今まで通り、空虚でいなきゃ」

空、虚…。

「ボクらは、価値の無い人間。廃棄された、木偶人形」

何も、求めては、いけない。

「そうだよ。今までも、これからも。ずっと停滞していようっ。」

クルクルと、繰り返して。

「ユラユラと、夢いで」

誰の為にもなれない、ならない、劣悪な塵芥にも劣る、無価値な幻。

「消えてしまえることを望みながら、いつまで経ってもしがみつく、愚にもつかない傀儡」

だって、

「だって、」

ボクは

「ボクらは、」

ボクハ、ボクラハ、ダレカラモ、ヒツヨウト、サレナイ、ムジン、
ナノダカラ。

カミナの考えは至ってシンプルなものだった。

シナチカ村の人間が追い出されて生きる希望を見失ったのなら、前の村に戻れば良いのだと。

村を支配している連中は断固阻止するだろうが、だったらこの俺様が、勧善懲悪宜しく立ち回って、成敗してやればいいと。

他人を奴隷のように扱っている輩だ。情け容赦は掛けなくてもいいだろう。

コテンパンに叩きのめして、二度とひねくれたことをしなくなるように、心の芯まで矯正してやる。

そう意気込んで、

「……」

意気込みは、虚空の彼方に吹き飛んでいつてしまった。

シキロの説明と、紙に書いた地図を便りにシナチ力村から南へ進み、

断崖に挟まれた道を通って、長々と歩いた先にある広い盆地には、

巨大な穴が、空いていた。

話に出てきた隣村の跡だ。それは流石のカミナもすぐに理解したのだが、

「穴が……二つたあ、な」

カミナが要のあったもう片方の村の位置にも、似たような大きな穴がポツカリと空いている。

悩まずとも知れたこと、シキ口達の前の村は、もう盆地には存在していなかった。

ちょっと予想してなかった事態に、カミナは立ち尽くして頭を掻いて、

もしかしたら生き残りがいるかも知れないと穴に近寄り、両方共に見下ろして確認。

「…あー、駄目か」

遠目からでも判る、大量の瓦礫や土砂の合間から覗くのは、明らか

に人の骨。

二つの村どちら共に生存者なし、死体は全て白骨化していた。

「参っちまったなー…、どうするよ、俺」

すっかり計算が狂ってしまって、途方に暮れる。まさかシキ口達の前
の村まで、落盤で消失していたとは思わなかった。

これで故郷の村に帰ることは不可能、問題解決の糸口も見えなくな
った。

「またシナチカ村に戻って説教垂れても、あいづら聞いてんのかど
うかも怪しいしな。ホント、地震の野郎を恨むぜ……」

元気が取り柄のこの男も、今は悪態を吐く他ない。

思えば、カミナの故郷・ジーハ村も地震が多くて困っていた。弟分のシモンの両親も天井の崩落で死に、それがきっかけで内気な性格が益々悪化したのだ。

さらにカミナの乗るガンメン・グレンを手に入れる時も、シモンは地震の原因を突き止めて熱く激昂していたし、

「…ん？ 地震の原因？」

はたと、頭の中に奇妙な引っ掛かりを感じて思考を止める。結構昔の出来事を感じる記憶、地上へ出て、ジーハ村の隣村であるリットナーでの会話を辿っていき、

カミナの記憶が蘇る。村で頻発していた地震の原因は、

ガンメンを操って人間狩りをしていた、獣人達であったことを。

「確か、ジーハ村を出る時、アゴのでかいガンメン野郎とヨーコがドンパチやらかしてて、地上の方の底が抜けてジーハ村に落ちたとか言ってるやがったが…」

ここにある村も、天井が崩れて村が壊滅している。

その要因　地震をガンメンが起こしているのなら、“ガンメンが直接村に落ちた”と考えることも出来る。

「そんで、壁が崩れて現れたもう一つの村もガンメンが潰したのだとしたら、だ」

その仮説が正しいとして、それがもし、ごく最近のことだったとしたら、

二つの村を蹂躪したガンメンが、未だこの付近で稼働している可能性がある
！

「だとしたら、…………シナチカ村がやべえ！」

考え至った答えにカミナは焦った。シナチカ村は、どの視点から見ても自衛出来るような装備は見当たらないし、地上で数少ない村だ。獣人達が放っておく筈がない。

急いで村へ戻らなければ、と踵を返して、来た道に戻って全速力で駆け出す。

手遅れになる、その前に。

…………。

カミナが村の跡地から去ってすぐ。

「ブータ、まだアニキのところまで着かないのか？」

「ぶいー、ぶ！」

「近くにはいないわね。あそこの溪谷の間を通ればいいのか？」

「ぶいー」

「……あれ。シモンさん、ちょっと止まって賣って良いですか?」

「どうしたの、ロシウ?」

「いえ、向こうに……もしかしたら……」

「スッゲー、スッゲー、でっかいあな!」

「おっきい」

「……あらま。これ、村ね」

「二つ共潰れてるわ…、地震かしら？　それとも、」

「ガンメン……どっちにしても、地震もガンメンが起こしているから変わらないよ…、」

「シモンさん？」

「嗚呼、ごめん。俺の両親も落盤で亡くなったから…」

「そう、でしたか」

「……そんなに深いって訳でもなさそうだけど、降りるのは諦めた方が良さそうね。お墓、作ってあげたいとは思っただけど」

「仕方がないわよ、降りてる最中に崩れてペチャンコ……なーんで、私は嫌よ？」

「そうね。…て、リーロン、何してるの？」

「ちょっとデータを採るの。この村がいつ崩壊したのか、とかね。記録しておいて損はないし、データが思わぬところで役立ったりするし」

「へー。じゃあ、俺達はここで待ってようか」

「良いわよ、そんなに手間は取らせないから……と、はい終わり」

「どうですか？」

「そうねー、時期は違うけど、両方共、ざっと三十年は経ってるわ。昨日今日の話でないのは判ってたけど、それでも最近のことね」

「…？ 村が潰れたのが昨日今日じゃないって、なんで判るの？」

「白骨化しちゃってるじゃない。死体って、腐って分解されるまで時間が掛かるし、干からびてミイラになったら、白骨だけでは残らないし」

「へ…」

「骨が散一してないことから、野生動物に食べられていないことも知れますね。それに食べられていたとしても、多少の肉片が残りますよね」

「う…」

「そうよ。だからこれは、ぱっと見ただけでも一ヶ月以上は経過しているってー……………あら、どうしたの、二人とも。顔色が悪いわよ」

「だって、ロシウとリーロンさんの会話が…」

「怖すぎるのよ……私もちよつと引いたわ」

「自然の摂理を説いただけじゃない。臆病ね」

「す、すいません。気が回らず……」

「ううん、良いよ。そ、それで、どうしようか？」

「手を合わせて、冥福を祈りましょ。せめてそれくらいはしてあげないとね」

「そっか。それじゃ」

「お墓を作らなかったことを逆恨みして、化けて出たり……」

「
…」

「
…」

「え？ 僕、また何か……？」

「ロシウー？ 今のは私も引いたわよー？」

……。

……。

⋮
○

どうすんだ？（後書き）

て、言ってる場合かよ！

いい加減にしやがれ（前書き）

どチクシヨウが！

いい加減にしゃがれ

ガンメンの襲来を危惧したカミナが、一路、シナチ力村へと急いでいた頃。

「　　シャア、日没まで時間もないし、サクサク終わらせてやる
シャ」

ズンツと地響きを鳴らして、一つの巨影が村へ近づく。

影は、カミナの乗るグレンと同じく、顔に手足がついたガンメン。
しかし通常のガンメンとは違い、口と、背面から突き出る尻尾が長
く伸びた奇形となっている。

蛇をモチーフにしたと思われるその名はボスウロロ。それを操縦する
獣人ダシャーは、コックピットで両脇の操作レバーを握り、先端
が二つに割れた舌をチロチロ震わせながら、村の広場にいる人達に
狙いをつけた。

「今日こそはこの悪夢とオサラバシャア！ 行け、ボスウロロオ！」

…。

「……………チツ、予想通りの展開かよ！」

帰路を辿り終え、村まで走ってきたカミナの目に飛び込んできたのは、逆巻く粉塵と激しい破壊の爪痕。

一足遅く、シナチカ村は敵獣人に襲われていた。

洞穴のほとんどは崩れて、周囲には負傷した村人達が無惨にも転がっている。

村の中央、広場の方には、この惨状を築いたガンメン・ボスウロ口が、村人に襲い掛かる真っ只中だ。

カミナは考えるより先に走り、敵の攻撃を止めようとするが、

「あいつら、何してやがる………なんで逃げねえんだ！」

敵が迫っているのに村人達は微動だにしない。逃げる素振りも、否、関心自体示さない。

そして眼前で行われた光景に、カミナは、愕然として足を止めた。

「な……………」

ボスウロロから伸びる口部の牙、当たれば致命的となる狂牙が迫って、呆然と立ち尽くしたままの村人が、

無情の一撃でもって、ビリビリに、引き裂かれてしまった。

「
ッッ」

生々しく凄惨な場面に、言葉を失う。

人一人殺されるのを目の当たりにして、呆気なく散った命をまざまざと見せつけられて、

カミナは、己れの無力さと不甲斐なさに、言い知れぬ怒りを覚える。

こうしていれば救えたかも知れない。もしかしたら助けてやれた。

なんて戯言を、のたまうことも考えもせず、ひたすら募り積もっていく激情に身体は支配されていき、

「お、おオオ………ん、の、ヤロオオオオツ!!」

激怒の矛先は敵ガンメンへと注がれて、爆発した。

いつも携帯している刀もない丸腰で、

村外れに置いてきたグレンを取りに行くのももどかしく、

ただ、今は、一分一秒すらも惜しんであのガンメンをぶちのめしたい。それだけを思い、生身では敵わないなんて理屈も隅に追いやつて、固く握り締めた拳を振り上げたカミナは、

「やめた方がよいよ」

「ッ。…シロツケ！」

疾走するところを、横から現れたシキロに呼び止められた。

彼は上手く逃げていたのか怪我はなく、出会い、一旦別れるまでと、やはり変わらぬ能面で、

「驚かすんじゃないよ、ったく…！」

何より見知った顔が無事だったことに、カミナの憤激は安堵の念と中和、冷静さを取り戻させる。

が、それも束の間。

「…… て、こんなところで突っ立つてる場合か！？ あの野郎は俺が相手すつから、他の奴らを連れて隠れてやがれ！」

すぐに場の状況を思い出して、捲し立てた。

ここでうだうだしている間にもガンメンは村人達を襲っている。それだけならまだしも、襲われる側には逃走する意思もない。

四の五の言っている暇はない。

なのに、

「良いよ、助けなくて」

「そつだ早く助け………て、ハア!？」

拒否された。またしても。

上手く聞き入れられなかったカミナは二の足を踏んでしまった。

助けなくて良い、というのは、自分達は殺されても良い、と言っているのと同義だ。

僕達は、これから、死ニマス、と。

遠回しに、けれど簡潔に、言い含められたのだ。

ねじ曲がっているにも、程がある。

「お前………いや、お前ら全員なあ、いい加減にしゃがれよ！
ずっと奴隷でこき使われて、村追い出されて絶望したからって、死
んでいい理由にはならねえだろうが……！」

馬鹿げた一言で再燃する怒り。

拒まれたからといって後込みするような気弱ではないのだ。時間も暇もないが、言い返さずにはられない。

「酷エ目に遭って辛くねー訳はねえよ。けどな、お前らまだ生きてんじゃねえか。ちったあ、前を向いて生きやがれ！」

カミナは寝惚けた頭を叩き起こす怒声で叱りつける。

あらんかぎりの叫びで、命の重さを知っているからこそその猛りで、

彼らを想うからこそ、説得する。

なのに。

「どうして？」

届かない。シキロには、シナチ力村には、

届かず、

「どうして、生きるの？」

「どうしてって、だから……」

「誰からも必要とされていないのに」

「……ッ」

並べられる、千切れた心。

「価値が無いのに」

「てめえ…………ッ！」

歪んだ考えを否定しようとするカミナへ、

「存在する意味の無い、」

「“無人”なのに」

「
」

嫌でも、理解させる。

貴方の解釈は、根本的に間違っていると。

これは生死にの話“ではなく”。

在る無しの、要るか要らないかの、問題なのだ。

いい加減にしやがれ（後書き）

…。

笑えねえんだよッ（前書き）

ちゃんちゃら可笑しいぜ!!

笑えねえんだよッ

「へ……へへ……。……へははは、は」

カミナは、力なく笑った。

「はははは。あっはっははははははは……」

可笑しいのか、怒っているのか、止めどなく笑った。

「くくく………なあるほどなあ、成る程ねえ。お前らは、必要ないって言われたら、はい判りましたって頷いて、消える訳だ。わっははははは」

「……」

笑って、笑って、とにかく笑って、

シキロのことも、村人のことも、新しい獲物を選んでいるガンメンも眼中になく、とにかくにも、笑う。

誰からも必要とされないから、と言った。

必要とされていた頃、それを当たり前のように感じていたからこそ
の妄言だ。

価値が無いから、と言った。

奴隷として生き、物として扱われてきたから、疑問にも思わなかっただけだ。

存在する意味が無いから、と言った。

本人達は意味がなければ、そこにいてはいけなさと信じ込んでいる、
証拠だ。

無人だから、と言った。

自分達はそのにはおらず、生きても、死んでもいないと抜かしやがった。

生存する意思を失ったのではなく、存在する意義を見失ったのだ。

「最つ高だなおい。アダイ村の比じゃねーよ、こいつら。マジでウケるぜ。アッハッハッハッハッハッハッハッ」

あまりに　あまりにも哀れなシナチ力村の無人達に、もう笑うことしかしてやれない、といった感じで。

抱腹絶倒とはまさにこのこと、笑い倒した男は前屈みでゼーゼー息切れして、

ふう、と一息入れて。

「ホンツトーに笑えねえ冗談だこの大馬鹿野郎」

ボソツと吐き捨て、つまらなそうに笑みを剥がし取って。

足下に転がった拳大の石ころを掴み、

「…どツツツツツせええい!!」

全筋肉に活を入れて、振りかぶって、投げた。

石ころは弧を描かず、猛烈に回転しながら突き抜けるような砲弾と化して一直線に飛び、

次なる標的を決めて、動かぬ人形に喰らいつこうとしていたボスウロウの口に、直撃する。

『ツシャア!? 誰シャ、今石を投げつけたのは!』

ぶつかった衝撃で狙いが外れたボスウロウから、甲高いスピーカー音が発せられた。

キョロキョロ辺りを捜して、犯人を見つける前に、カミナの方から名乗りを上げる。

「オウオウオウオウ！！ このヒョロっちいガンメン野郎が、悔しかったらここまで来やがれ！」

中指を立てて挑発ポーズ。

狩られる側である人間に舐められて、敵ガンメンの搭乗者は怒り狂い、

『ヒョロっちくなんな

』

カミナを見て、

『…』

ピタリと、硬直した。

「あ、あの人間は、あの時の……ッ」

ボスウロコのコックピットでは、ダシャーが、昼前のやり取りをフラッシュバックさせていた。

人間如きに不覺を取り、食肉として見られたあの屈辱が、

《肉……肉だ……肉が走ってるぞオ
ツ!!!》

《にくにくにくにくにくにくにくにくにくにくにく
クニクニクニクニク》

喰われかけた憎しみが、

《にッッッきゅうううううううううううッッッッ》
「

《がつぶウウウウウウウウ！！！！》

どうかといえば、屈辱とかよりも、

《ガウガウガウガウガウガウガウッッ》

《頂きます》

「あ……ああ……嫌ア
ッッッ！？」
ッッッ！ 食べないでえ

恐怖感が強すぎて、ガタガタ震え出してしまった。

ダシャーが戦意喪失したことでボスウロ口も停止に。外にいて、中の様子が判らないカミナは躍起になって挑発を繰り返す。

「くおらッ、聞いてんのか！ それとも怖じ気づきやがったか！？」

その通りです。

「……いや、待つッシャ。奴は俺が乗っていることを知らないシャア？」

ギヤーギヤー喚いているカミナの声に、ハッとダシャーは気づく。挑発がエスカレートして、尻を突き出して叩くカミナを強く睨む。

相手はまだ気づいていない。それに、こちらにはガンメンだってある。

恐れる必要など、ない……！

「そつだシャア………舐められっぱなしでは終われんのシャア！
俺は、今、トラウマを乗り越えるっシャア
ツ……！」

決意と共に、ダシャアの咆哮が轟いた。

「俺は、今、トラウマを乗り越えるっシャア
ツ……！」

「何が？」

臀部を叩くカミナに、その気迫は伝わらなかった。

『シャア、ズタズタにしてやるシャー!!』

勢いに任せて再びボスウロロが動き出す。村人には目もくれず、カミナだけを標的にする。

カミナの思惑通り、誘導されてくる。

「っし、そうだ。ついてきやがれ！」

向かってくるボスウロロに対し、カミナは逆に向かわず、別方向に走り出した。敵前逃亡なんて死んでもやらなそうな男だが、現状、そんなことは言っていられない。

村人達に被害が及ばない場所まで、思う存分闘える場所まで、敵を引き連れていかなければいけない。

.....。

カミナが敵ガンメンを連れていなくなり、取り残されたシキ口は。

「……行っちゃったね、無駄なのに」

一人でボソボソ呟いて。

（そうかな、本当に無駄かな）

聴こえぬ声が、返事を出した。

「無駄じゃないって？ 君がそんなことを言うなんて、可笑しいね」

聴こえぬ声に、シキロも応えた。

可笑しいと言いながら無感情に、無感情ながらも皮肉に、反論していく。

「侵略者を倒しても、シナチ力村は希望を持たない。そんなことをしても、無意味だ」

（そうかな、無意味かな）

「無意味だよ。人形は人形のまま、無いものは無いままだ。ボク達はその中には無いし、何処にも在りはしない。ずっと、ずっとだ」

(まるで蜃気楼のように?)

「そうだよ。ボク達はいないんだ。いるように見えるだけで、実像は無い。夢いで、虚ろいで、だから、」

(救われない、て?)

「…」

シキロは黙る。深く、深く、黙り込む。

反して、聴こえぬ声は、問い続ける。

(それならボクは、どうして此処にいるの?)

「…」

(どうして、喋るの?)

「…」

(どうしてあの時、)

「…あの人に、声を、掛けたんだろう」

あの時。

飢えたカミナが獲物を逃がし、うちひしがれていた、あの時。

カミナはシキロに気づいていなかった。

話し掛けなければ、カミナは気づかぬままに立ち去っていた。

それで幕は下りていた。終わっていた。

なのに。

（どうして声を掛けたの？ 不可解だよ。ねえ、どうして？）

「それは…」

言い淀む。

答えられない。

判らない。

どうして、

（ボクが、あの人を、必要としたんじゃないの？）

「…、」

聴こえぬ声が、シキロの心臓に食い込んだ。

その時。

『……………聞イ
つてつかア!!?、シナチカ村のしみ
つ垂れ共オツツ!!!!』

村外れの辺りから、耳を劈く大声が、

村全域に、木霊した。

笑えねえんだよッ（後書き）

耳の穴かっぽじって、よく聴きやがれ!!

立ち止まんなア!! (前書き)

すっ込んでろッ!!

立ち止まんなア！！

少し時間を巻き戻そう。

『…シャアー！！ 待ちやがれッシャ …！！』

「待てと言われて待つカミナ様じゃねエ ツツ！！」

シキ口達の身を案じて敵を陽動するカミナは、村の外までがむしや
らに走っていた。

風雨によって削られた円錐形の奇岩群の隙間を、ジグザグに縫って
駆け抜けていく。

背後からはボスウロロが、邪魔な岩を蹴散らしながら追撃。

飛んでくる尖った岩石や牙の猛攻をかわしつつ、追いつかれては根

性を見せて引き離す。

たまに、

『ちょこまかちょこまかと……ッ！ かかって来いって言うつといて、逃げるなんて情けねー野郎だシャア！』

「んだとコラ！？ こいつは逃げてんじゃねえ、戦略的撤退だア！
」

飛来物と一緒に投げかけられる罵声に、いちいち言い返して。

「……見えた！ あそこまで行きやあッ、こっちのッ、もんよオ！」

大分息が上がってきて危ういカミナを、見慣れた紅いボディのガンメンが出迎える。

後続に行くダシャーも、カミナの向かう先に気づいて目を見張った。

「あのガンメン……あの肩のマークッ！ 最近噂になってるグレン団シャア！？ じゃあ、今追い掛けているのはそのリーダー……」

本部より報告のあったグレン団の活躍を思い出し、一抹の不安を抱いた。

グレン団はこれまで、相当な実力者である極東方面部隊長ヴィラルを撃退してのけ、各地で活動する他の仲間達もことごとく返り討ちにしている。

近々、獣人軍四天王の一人であるチミルフが動くとかえ囁かれる程のグレン団を前に、ダシャーは自分が敵うのかと逡巡、

《頂きます》

「…頂くなッツシャーー！！」

トラウマをバネに、挫けかけた心を奮い立たせて、仇敵を捉えようと口部を伸ばして攻撃した。

しかしカミナは余裕を保ったままだ。まだグレンまで距離を残すが、ダシャーが迷っている隙に猛烈ダッシュして、両者間に差を空けている。

いくらボスウロロが牙を剥いても、カミナにはかすりもしない。

「ヘッ……残念だったなッ、そこからじゃあよッ……届かねえ！！」

息切れしながらも勝ち誇った。グレンまで辿り着ければこちらの勝ちだと言わんばかりに。

それを受けて、ダシャーは。

『……………ニイツ』

「……？」

邪悪にほくそ笑んだ。

瞬間、

『……………油断大敵ッシャア！！！！』

「な……………うおアア！？？」

限界まで伸ばされていた口が“さらに伸びて”、カミナを地面ごと弾き飛ばした。

「……………ッッッ」

全身を襲う強い衝撃、それに歯を食い縛って耐えるカミナは目撃する。ボスウロロの伸びる口部の先、本体を越えてその後ろの尻尾が、極端に短くなっているところを。

ボスウロロの口と尾は直接繋がっていて、連動して伸縮することが出来る
！

『シャア！！ どうだシャ、思い知ったシャ、人間！』

舞い上がった砂埃にカミナは吞まれ、先程とはうって変わって強気なダシャアが歓喜に湧いた。

確実に仕留めたと確信し、不様な姿を拝もうと走り寄って、

『シャ、ッハッハッハッ……………ハ？』

舞う砂塵が収まったその場所に、カミナの姿はなかった。

あるのは、ボスウロクの口撃で抉れた岩盤と砂だけ。

想像していたものと違う光景にはて？ とダシャー or ボスウロクは小首を傾げて、

『…思いっきり吹っ飛ばしてくれてありがとうとよ！ おかげさんで、早くグレンのところまで来れたぜ？』

間の抜けた仕草をしている間にグレンが作動、コックピット内からはカミナが、健在ぶりを披露するように憎まれ口を叩いた。

その裏では、打ち身と擦り傷と疲労と空腹で、内心かなり疲弊していたが。

へたれている時ではないと、元気を装って強がる。カミナには、やらなければならないことがあるのだから。

『シャ………シャ〜！　それが、何だつて言うんだシャア！？　そっちはまだ、合体してねえっシャ？　だったら、まだ勝機はあるっシャア！！』

こっちはこっちでまた強がっていた。ガンメンの有無で築いていた自信が、脆くも崩れ去っていく。

が、ダシャーの言い分もあながち的外れではない。グレン団の強さの根幹は、カミナの乗るグレンと、シモンの乗るラガンの二機が合体してからなる『グレンラガン』によるもの。

つけ加えれば、グレンラガンの強さはラガンの能力で成り立つ。グレン単体では戦闘能力も、機体耐久度も格段に落ちてしまう。

『やってやるシャア………ここでグレン団を潰して、一旗上げてやるッッシャ　　！！！！』

勝てば汚名返上、のみならず、栄光まで掴める。またとないチャンスにダシャーは一念発起、果敢に立ち向かっていった。

『シャアアアアアッ!!』

ボスウロロの尻尾が唸る。今度は口部を縮め、最大まで伸ばした鈍器に遠心力を加えて、

ゴドン!! と、グレンの左肩めがけて叩きつけた。

まともに食らってれば、通常のガンメンを軽く大破させる威力だ。これではグレンですらひとたまりもないだろう。

まともに食らってれば、だが。

『気合い入れて来たところ悪いんだがよ…』

『シャ……ッ』

尾は腕でしっかりとガードされて、グレンはほぼ無傷だった。

最大の一撃を防がれたダシャーは呆けて、カミナは構わず、腕を尻尾に回し込んで脇で挟み、ギュッと絞める。

もう片方の腕も尾を掴み、体勢は低く、腰を捻ってボスウロ口を引っ張りあげると、グレンを中心にゆっくりと回転し始める。

『先客を待たしてんだ、ちいとばっかし、どっか行ってやがれエ…
……ッッ』

『え……え、ええ?!』

「そんで、だ。次は」

戦うべき敵を一時退場させて、グレンはシナチ力村へと向き直る。

やらなければならないこと。

果てしない馬鹿共に、言って聞かせなければならないことを、言う。

グレンのスピーカーの音量を最大にして、

『……………聞イ
つ垂れ共オツツツ！！！！』
ってつかア！！？、シナチ力村のしみ

腹の奥底から嘔き上がるものを、吐き出した。

傷ついていようが、疲れていようが、腹が減ってひもじかるうが、

そのくらいの些事など、捻り潰して喚き散らす。

『必要ないだの価値がないだのいる意味がないだの！ すつとぼけたことを散々並びたてやがって、ふざけんのも大概にしるよッ！？』

誰にも聞いて貰えなくても、誰にも声が届かなくても、そんなことは関係ない。カミナは想いの丈をぶち撒ける。

聞き届けて貰えないなら、勝手気ままに叫び倒す。

それが、この男のやり方。

グレン団不撓不屈の鬼リーダー・カミナの、生き様なのだ。

故に、叫ぶ。

全身全霊で、声を張り上げる。

己れの我を、貫き通す…！

『誰も必要としてくれないだア………？ だつたらア、テメエがテメエを才、必要とすりゃ良いじゃねえかア！！！！』

「
だつたらア、テメエがテメエをオ、必要とすりゃ良いじゃ
ねえかア！！！」

「
…」

シナチ力村の隅々まで、カミナの声が行き渡る。

「俺様は、やりたくねえことは死んでもやらねえカミナ様だ。やり
たいことは死ぬまでやり通す、不撓不屈のカミナ様だ！！」

「
…やりたい、こと」

空気を震わせ、大地を揺るがし、漢の魂をぶつける。

『誰から何も言われなくたってなあ、笑いたい時は笑えば良いし、泣きたい時は泣けば良い！ム力ついた時は、怒鳴り散らして騒げば良いし、面白けりゃあッ、また笑え！！』

「…誰から、言われなくても」

「笑、う……」

その一言一句が、村人達の虚ろな身体を、穿っていく。

「…………馬鹿だね。あの人は」

そんな中で、出逢った頃から彼の声に耳を傾けていた少年は、静かに口を開いた。

「自分で自分を必要とする、なんて屁理屈、聞いたことないよ。本当に、馬鹿だ」

（うん、本当に面白い馬鹿だよね）

聴こえぬ声も、賛同した。

そして声は、シキロに訊ねる。

（話し掛けて、正解だった？ あの人を村へ招いて、良かった？）

「……」

シキロは、また黙った。深く、深く、黙り込む。

でも、それは、答えられないから、ではない。

答える、までも、ないのだ。

（あの人は…カミナは、きっと色んな人から必要とされるんだろうね。行動力もあって、強い意思もあって、絶対に折れたりしない。だから、誰もが憧れて、惹かれて、慕うんだろうね）

「……」

聴こえぬ声は、羨ましそうに、語る。押し黙るシキロに代わって、淀みなく、推察する。

（でもさ、カミナが色んな人から必要とされるのって、自分から望んだ訳じゃないよね。必要とされたくて、そんな自分に成ったんじゃない。それは、結果的にそうなっただけなんだ）

カミナの生き方は、自己中心的で独りよがりなもの。欲望に従い、偽らず、常にありのままの自分を露出する。

誰かから言われたんじゃない。命令されたことじゃあ、ない。

己れの為に、そう在る。

「……」

（誰かに必要とされなくても、其処に居続ける。誰にも文句は言わせない。だって、自分のことを決められるのは、自分自身だけだから。だから、）

「……ボク達も、ずっと此処に、留まっていた」

曝け出す、本音。

無いと言いながら、在る矛盾。

空虚でありながら、形を保っていた。

それは、自分達が、

（
ねえ、シキロ。……ううん、ボク。もう、良いんじゃない
？）

「……」

聴こえぬ声が、諭す。

自分に正直になるよう、迫る。

（ボクはもう、いない“ふり”をするのは、疲れたよ。そろそろ、動こう？）

「……………ボク、は」

シキロは、返答に詰まった。

決心が、つかない。

その最中にも、カミナの声は、シキロの鼓膜に鳴り響いて、

『いつまでも立ち止まってんじゃねえ！！一生に一度のテメエの人生だ……………テメエの好きに、生きやがれッッッ』

「……………」

（どうしたい？）

「……ボクは」

シキロは、

「………“僕”は、止まりたい。もう、繰り返すのは、嫌だ」

悪夢から醒めた、穏やかな顔で、答えた。

聴こえぬ声も、そっか…と、嬉しそうに、頷いた。

動き出したい聴こえぬ声と、

止まりたいと願うシキ口。

二つの願いは、同一だ。

やっと、二つは、一つになる。
。

（それじゃあ、
）

「それじゃあ、
」

(動き出そう)

「終わらせよう」

「(永遠に廻る続ける螺旋から抜け出して、僕達の幻想に終止符を打とう)」

立ち止まんなア！！（後書き）

判ったかコラアッ！？

クライマックスだア！！！！（前書き）

スカッとしたぜ！

クライマックスだア！！！！

…、

『…………… テメエの好きに、生きやがれッッッ』

溜まっていたものを、全て吐き出し終えて。

「……………ぶはッ！ ハッ、ハア、はア、ハア…………ッ」

カミナは、痩せ我慢が尽きるように頭を垂れた。

満身創痍の身体に鞭打ち、顔中に汗が滴る。荒い呼吸を刻みながら、弱々しくも笑みを溢す。

「ゼッ……………ぜえ……………っこれで、まだ判ら、ねえならッ……………一人ずつ
ハッ……………ぶん殴って、やつから、な……………ハアッ」

伝えたいことは、伝えた。

聞いても、届いてもいないだろうけれど、とりあえずは出し尽くした。

単なる自己満足に過ぎない、無駄なことなのかも知れないが、

それでも良い。アダイ村のように、完全に拒まれていた訳ではないのだから。

あの村で、カミナもまた、部外者だからと、不必要とされたのだから。

なんとなく、シキ口達の気持ちを理解出来た。出来たからこそ、許せなかった。

要らないと言われたからといって、自分を捨てることはない。それこそ、自分を廃棄する必要は、無い。

前を向いて、足を踏み出し、止まらずに、歩いていけ。その行動の価値なんて考えるな。意味なんて、考えるだけ損するだけだ。

感じるままに、在れば良い。

シナチ力村は、決して、無人などではない
…。

と、そこまで深くと考えていたかどうかはさておき。

一つだけ確実に言えることは、カミナにとってシナチ力村の在り方は気に入らなかった。なので物申した。

大体そんなところだろう。

アダイ村から引きずっていた鬱憤も晴らせたようだし、カミナの気分は割合上々だったが、

「くう……腹、減った……やっぱ足んねえよ、あんだけ……
…でアッ!?」

息を整える暇もなく、背後から不意打たれた。

何事かと振り返ってみれば、遠くに飛んでいったボスウロロがいつの間に帰還、グレンの背中に噛みついている。

搭乗者はどうやら怒り心頭らしく、シャーシャーと甲高く鳴く。

『コノヤロツ、人を何処かに投げといて、何一人で騒いでるっシャー!! お前の相手はこの俺シャー!? 盛大に無視してんじゃねえッシャー!!!』

「ええい……、今から相手してやろうと思ってたところオ…………ッ」

すっかり忘れていたことは内緒で、カミナはすぐさま反撃、ガツチリ食い込んだ牙を外そうとする。

外そうと、

「は…………このッ…………て、ハズレねえ、だとお…………ッ？」

体力の限界がきているせいか、いくら気張っても力が出ない。

上機嫌が一転、窮地に立たされて焦燥するカミナを、ダシャーが容赦なく追い詰めていく。

『シャア！！ 装甲を噛み碎いて、中身を引きずり出してやるシャア！！』

「ち、くしょ……………情け、なさッ……………過ぎんぞ、カミナアア……………ッッ」

どれだけ足掻いても微動だにしない。

体勢の悪さも相まって、手の出しようがない……………！

「く、お、お、オオ……………！！！」

『これでえ……………終わりシャア！！！！』

ビキリ、と亀裂が走る。

じつくりと、ジワジワと、裂け目が広がっていく。

カミナはもがき、牙は外れず、

ダシャーは笑んで、舌なめずりし、

「…………カミナア

ッ！！！」

青白い閃光が、空気の膜を破いた。

射出された光の軌跡が、狙い違わずにボスウロロの側面へ激突。

『ジャ！？』

「っとオ、助かった……！」

着弾の威力に押されて機体は倒れ、グレンに食い込む牙も外れる。

危ういところを救われてカミナはホッと安堵、横槍を入れられたダシャーはもう何度目になるのかぶちギレて、

『今度は一体何だって……………ハッ』

「ありやあ……………へっ、美味しいところかさらいやがる。
つてたぜ、シモオン！！ ヨーコオ！！」

待

ダシャーの顔は引き吊り、カミナの顔は澁刺とした。

両人の眼に浮かび上がったのは、こちら側に向けて猛進してくる小型のガンメンの影。

紐で引っ張るブロック型の家が、凸凹の激しい地面で跳ね回っているのも気にしない。

ようやく再会することの出来たリーダーを助太刀する為、グレン団は、超特急で二体のガンメンに近づいていた。

「
… ああ、あの紅い機体、やっぱりアニキのグレンだ！」

短い足で懸命に走るラガンのコックピットで、ゴーグルを掛けて遠くを睨むシモンが断言する。

隣で立ち上がり、火を吹いた超電導ライフルから空薬莖を排出、次弾を装填するヨーコも頷き、

「聞き覚えのあるうるさい声を追ってみれば、大当たりね。でも、敵と交戦中とは思わなかったわ」

「うん、早くアニキと合流して…」

さらに加速しようとハンドルを操作する手前、後ろのグレンハウスから、必死な叫び声を送られた。

「し、モンっ、さん！ 提…あんが！ あっッ、あるの、です……ギャー!!」

小刻みに揺れて喋りづらそうなロシウと、

「ハウスは置いて……ヒイア!? ツてえ、良いから! こんな、揺れる、なん……聞いてツないわよ?!」

手製のメカや機材が散らばるのを抑えて訴えるリーロン。

「わゝい、わゝい、ジャンプジャンプゝ!」

「のー」

ギミー、ダリーは器用に跳ね回って苦にせず、むしろ大いに楽しんでいたが、

「あ、ごめん……」

劣悪な家庭内環境に苛まれる住人の苦情に、シモンは思わず速度を落とす。他に敵がいなくても限らない状況で、ロシウ達を置いていくことは論外だ。

カミナの加勢に急ぐのと、グレンハウスを放っていけない焦れっさに、シモンはどうにも行き詰まってしまった。それを見かねたヨーコが打開案を提示、

「シモン、ハウスは私が残って守るわ。だから早くカミナのところへ
って、」

「ぶいー！」

シモンの首にしがみついていたブータもヨーコの胸の谷間に移動、ピッとグレンを指して一鳴きした。

小さな仲間の意図に気づいて、ヨーコはクスリと笑って代弁してやる。

「ブータも一緒に守ってくれるって。…行って、シモン！」

「うん、判ったよ」

仲間の後押しを受けて、ラガンは紐を手離して再加速する。ヨーコとブータは直前で後ろに飛び、地面をスライドしながらグレンハウスに残った。

「アニキィ ツ!!」

身軽になったラガンが全力疾走する。グレンまで脇目も振らずひた走り、差し迫ってくるとコックピットのシャッターを閉め、飛び上がって下腹部の足を収納。一本のドリルを出現させてドリルヘッドモードへ。

一つの弾丸となって突進してくるラガンを、グレンは両腕を広げて迎えた。

『オオ、来いシモン!! 合体だァ!!!!』

突撃してくる相棒のドリルが、グレンの頭部めがけて直滑降、二つのガンメンが一つと　　…、

『させるっ シャアー！！！！』

なるのを食い止めようとボスウロロが奮起、ラガンの行く先を阻もうと口部を伸ばす。合体されれば、勝敗は決してしまう！

だからこそ、

「それは、こっちの台詞よ？」

『え……………ジャウ！？』

邪魔が入らないよう、グレンハウスの屋根に仁王立ちしたヨーコが援護射撃、ボスウロロの口を弾く。

結果。

『く…そおオオオ！！　またやりやがッ』

『よお、待たせちまったなあ？』

『、』

心的外傷を呼び起こす剛胆な声が、ボスウロロに、内部のダシャーに降り注いだ。

恐る恐る見上げれば、二つの顔が合わさった八頭身のガンメンが、腕組みして影を落としている。

合体したことで、全体的に寸胴型だったグレンのボディはスリムに

変形、

頭に突き刺さったラガンには、宿敵ヴィラルのガンメン・エンキから奪った、三日月シンボルの兜が光る。

威風堂々の佇まいの鬼神、その名は言わずと知れた『グレンラガン』。

数多の獣人軍を殲滅してきた人間の英雄機その降臨に、ダシャーは青ざめて硬直。

怯える蛇に、なんとかこうにか持ち直したカミナの、無慈悲な言葉が掛けられる。

『早速で悪いんだがな、テメーにど突かれたり、つつ走ったり、空きつ腹が身に堪えたりで、あんまし余力が残ってねえんだア…』

言って、グレンラガンの右腕が上がって拳が握られる。手首の、袖

にあたる部分に備えられた二つの吐出口から鋭いドリルが、白銀の輝きを放ちながら高速回転する。

高速は次第に音速へ、

音速は即座に光速へ、

光速はやがて神速へ。

頭上で絶え間なく気合いを放つ、最高の相棒^{シモン}の力を借りてカミナは、

『最初っから、クライマックスで逝かせて貰っぜっ。』

危険な香り漂う台詞を、吐いた。

『ていうか、それ、訴えられ……………』

『ハアン！？ 訴えられるだあ！！？ こちとら訴訟上等、敗訴覚悟のカミナ様だあ！！ 文句があんならア！ あの世で訊いてやんぜエエエエエツツ！！！！』

今にも泣き出しそうな突っ込みも、最早この男には、通用しない。

振り上げられた鉄拳は天を突いて、

降り下ろされるべき場所へ、ボスウロ口の脳天へと、

降り下ろされる。

『助けるのが間に合わなかった連中………殺られちゃった奴の分の
ゲンコツだ。多少痛いのは我慢しやがれ』

クライマックスだア!!! (後書き)

きっちり落とし前つけてやったぜ!!

…誰だっけ？（前書き）

見覚えが…、

…誰だっけ？

戦いは、カミナとグレン団が合流したことで形勢逆転、あっという間に決着がついた。

グレンラガンの二対のドリルがボスウロロの装甲を掘削し、拳が頭部にめり込んだところで回転力をさらに倍加、ボスウロロを内側から爆散させた。

後に残るのは吹き荒れる黒煙と細かな鉄屑、爆発の熱で地面が焼け焦げた跡だけだ。

敵は倒した。そのことにシモンは安心して、直下のグレンコックピットにいるカミナに話し掛けた。

「間に合って良かった。大丈夫、アニキ？」

「…」

カミナから応答はない。ん？ とはてなを浮かべ、もう一度呼び掛ける。

「アニキ？ おーい、聴こえてるー？」

「…」

応答、なし。 うんともすんとも言わない。

さっきまであんなに元気に喋っていたのにどうしたんだろうか、と不安になる。 助けに入る前に結構苦戦していたし、怪我をしているのか。

嫌な予感がしたシモンは、すぐにグレン側と通信。 モニターからグレンの中を覗き見た。

そこに映っていたのは、

「……………」

ボロボロに傷ついて、力を使い果たし、動かなくなってしまった男の、亡骸……、

「あ…………アニキイツ!!」

「んあ？　どした、シモン」

「うわ、ええ?!」

ではなく、普通に返事が戻ってきた。気を失っていただけらしい。

一瞬死んだものと思わせておき、血相を変えて叫んだシモンを二段構えで驚かす。人騒がせなことこの上ないカミナにシモンも一気に脱力、溜め息混じりに口を尖らせた。

「もー、驚かせないでよ。迷子になったり死んだフリしたり、心臓に悪いって…」

呆れた調子で苦言を呈する。半時前では辛口だったが、やはりカミナのことは心配だった模様。

その弟心を知らない兄貴は、反省もしないで反論。

「バカヤロ、この俺様がそう簡単に死ぬ訳ねえだろ！ それと、迷子になってたのはお前らの方だ！！ おかげでこっちは探し回ってだな！、だからッ、そのお、あれだよ……………」

「アニキ？」

失速して、段々萎んでいく声にシモンは訝る。

まさか、今度こそ体調が優れなくなつたとか……………、

「…腹減つたんだ。なんか、喰わせて」

「…」

ガツクリきた。特に肩辺りに。

まあ、朝にはぐれてもうすぐ夕刻だ。その間何も食べていないなら、それはお腹も空くだろう。

本当はシナチ力村で精一杯のおもてなしを頂いてはいたのだが、

そんなことは露知らないシモン、ともかく無事だったことを素直に喜んでおくことにして、無気力カミナを励ました。

「食料ならハウスにあるよ。皆のところに帰ろう」

「……………」

返事は、またしてもない。カミナは上の空でグレンのモニターにか

じりつき、とある物体を凝視している。

「アニキ、聞ってるの？」

「待てシモン、ちょっと……あと少しで思い出せそう……」

「え？」

シモンも気になってカミナの見つめる先へ、ラガンの視点を变える。

そこは敵ガンメンが爆破した、ブスブスと火が燦っている真っ黒な場所。特に興味がそそられるような対象は、

「？ 何か動いて、」

燦って白煙を立ち上らせる黒い物体があった。細目で見ると、それ

が人の形をしているのがよく判る。

と、ここまでキーワードが出ているなら答えは一つしかない。ガンメンが破壊され、そこに残る動くモノといったら。

「アレ、さっきのガンメンに乗ってた獣人か！」

「シャ、死ぬ……とこだった、シャ……」

ボスウロ口爆破地点。

そんなところで奇跡的に助かり、美味しそうな匂いを薰らせながら泣きじゃくるダシャーは後悔していた。

欲なんか出さず、トラウマなんか気にしないで、恥も外聞もかなぐり捨てて逃げていれば良かったものを。

結局、先に討たれていった同胞達と同じ末路を辿ってしまった。

グレン団、そしてグレンラガン……………、噂に違わぬ強さだった。

どちらかといえば、グレンラガンに敗けたというより、トラウマに敗けたといった方が的確かも知れないが。

敵に勝つことも、トラウマを克服することも、当初の目的、シナチカ村の人間掃討も果たせなかった。これを不幸と呼ばずになんと呼ぶのだろうか？

なんて嘆いている状況ではなく。

「うう………そ、そんなことより、早く、逃げないとおお………」

ダシャーは只今、自身の身を守る術がない。先程までのカミナと立場が入れ替わっている。

グズグズしていればグレン団から一斉攻撃を受けかねない状態だ。何より、アノ人間に再び襲われるなんて、想像するだけでも恐ろしい。

追撃してこないところから鑑みて、恐らくボスウロロの搭乗者が生きていることは知られていないようだし、ここは逃げの一手…、

『…あア

ツツ！…！？』

「うひい？…！」

そうは問屋が卸さなかった。

息を潜めて、這いつくばって岩の陰まで移動しようとするダシャーに、不吉な予感をさせる大声が届けられる。

恐る恐る見てみれば、グレンラガンのグレン部分の顔が、表情豊かに喋っている。

『思い出した……思い出したぞお!!』

『アニキ、何を思い出したの?』

ラガンの顔も搭乗者の意思を反映、不思議そうに聞いた。けれどグレンはその問い掛けには応じず、口部の入口が開いて操縦席から人間が、

そう、ダシャーが最も畏怖する人間が、

グレン団、不撓不屈の鬼リーダー・カミナその人が、

「お前は、あの時の……………」

確りとダシャーを見据えて、それが何者であるのかをよく確認して、

っ

一言。

「俺の、肉ウ……………ッッッ！」

.....、

うん、もう、良いんじゃないかな、君の肉で。

「.....ッてえ、なんでそこで妥協するんシャ！？　なんでそこで日和るんシャー！！　語り部なら、きちんと否定しろッッシャア！！！」

抗議された。そんなこと言われても。

とか言っている間に、カミナがグレンを飛び降りて猛然と走って来ましたよ？

「ヒイイイ！？？」

ズンツとダシャーの前にカミナが立ちはだかる。

顔を極限に近づけて、サングラス越しからダシャーを舐めるように見回す。

その間、ダシャーは蛇に睨まれた蛙ならぬカミナに睨まれた蛇で、ガチガチ歯を鳴らしたまま石化、

見ていてとっても切なくなってくる蛇をたっぷり見終えたカミナは。

「…お前、獣人だったのか？」

「今更！？　ねえそれ今更！！？　最初の邂逅で気づけるところっ
シャそこは！！！」

素っ頓狂な発言にダシャーが心から突っ込んだ。そりゃもう力の限り突っ込んだ。

それにカミナは反応を示さず、顎に手を当てて一考。

口元から涎を垂らしながら質問する。

「…………尻尾は、駄目か？」

「何が？！？　食べてもいいってことシャア？！　んなもん駄目に決まってるツシャ！！　何で尻尾なら良いと思ったんシャ、何で尻尾なら承諾されると思ったんシャア　　ッッ！！！」

ダシャー絶叫。極度の緊張と恐怖で気が触れてしまったのか、もの凄いい剣幕で捲し立てる。

しかしカミナは怯まない。こちらもそろそろ限界が来ていた。

一度は逃がし、二度目は逃すまいと、にじり寄る。

「さっきから、肉の焼けた匂いが鼻についてしょうがねえんだア
…………ご託はいらねえ…………、喰わせろッッッ
！！！」

「え、あの、ちょっと待って、まだ心の準備が出来て、せめて神に
祈る間をッ」

ガブッ。

-
-
-
- L

.....。

「
終わったの？ 変な叫び声をするんだけど」

グレンハウスの窓から、様子を見に来たリーロンが顔を覗かせた。

家の中では船酔いロシウが、ギミーとダリーに氣遣われている。

リーロンも多少フラフラで、ハウスの屋根に腰掛けたヨーコ（谷間にブーツのオプション付き）に説明を求めると、

「とつくに終わったわ。敵のガンメンは壊れて、獣人はカミナに追われて食べられかけてる」

気だるそうに返して、遠目から、カミナがダシャーを追いかける姿と、後ろでシモンの乗るグレンラガンが困っている一風景を指差した。

カミナは打撲の痣や擦り傷が目立ち、パツと見て酷く不安にさせられる様を晒している。なのに本人はまるで無視して、元気に走り回っている。

リーダーの変わらぬ息災ぶりに、想定内だとリーロンは頷く。と同時に、ヨーコの憂鬱げな、カミナが無事なのにあまり喜んでいない態度を不審そうに見て、

「何よ？」

「いえ、ちょっと違和感感じただけー、」

カミナの方と交互に見合わせて、

「嗚呼、そういうこと」

ポンと手を打って察した。

なんだかんだ言いながら、“こちらも”かなり心配していたということ。

密かに持っていたその感情が無用なものだったので、機嫌を損ねているのだと。

殺したってまず死なないと言い捨てておきながら、敵にやられかけた姿を見て考えを改めたのか、

それとも最初から強がりで、実はロシウより、誰よりも心配していたのではないか。

どちらにしても、素直でない彼女の微笑ましい事情を呑み込んだり
ーロンは、意図せずプツと吹いてしまう。

「…何よ」

刹那、ヨーコから鋭い眼光が飛んだ。

「いえいえ何も。冷めたフリしてお熱いことね」

リーロンはニヤニヤしながら茶化して、

「リーロン、貴方なら知ってるわよね。……口は災いの元って」

ガチャコツと膝に置いていたライフルの銃口が、おふざけしている
メカニックをロック・オン。

その頃には、対象の頭はハウスの中に引っ込んだ後だった。

ところでブータは。

「ぶいー……」

谷間に取り残されて、ヨーコの沈静なる怒りに気圧され、震えていた。

…誰だっけ？（後書き）

思い出していいーただきまア

ツツす！！！

え？（前書き）

…（食事中）。

え？

「待ちやア

がれえ

「！！！」

「いゝゝゝやアゝゝゝゝゝゝッッッ」

凶悪なる餓鬼リーダー・カミナと、黒焦げダシャーの果てない追いかけてこは、佳境に差し掛かっていた。

獲物を背中から押し倒して、餓えたケダモノがこんがり風味の鱗へと喰らいつく、

「ガジガジガジガジガジガジガジ！！！」

「ギョワ
あッ、ア

「?!! ちよつ待てて本気で千切れ、ジ、あ、
ッッッ」

そんな二人の、過激に過酷な弱肉強食の世界を観覧する人物は。

食べることに夢中で気づかないカミナを、その名を呼んで振り向かせる。

教えて貰った彼の名を、呼ぶ。

「カミナ！」

「あう？」

声に、カミナは食事を止めて、脇腹に刺していた歯も抜いた。

痙攣してぐったり横たえるダシャーは放置して、声のした方へ視線をやり、

「それは、食べない方が良いと思う」

「シロツケ…」

自分は何処にもいない、“無人”だと語った少年を見つけた。

虚空に成り済まして、自身を見失っていた少年が居た。

なんの感情も、なんの色も持たなかった少年が、

無であることを棄てて、心赴くままに笑っている。

白髪の少年シキロが、そこに在った。

「…へへっ、どーしたシロツケ。名前は、どうせ忘れるから覚えな
いんじゃないかったっけか？」

カミナの食い意地の悪さを目の当たりにして、クスクス笑うのを堪
えられないシキロに、当人も自然と笑みを溢しながら、意地悪く言
う。

忘れるから、覚えな。そう言ったシキロが、初めて自分の名を呼
んでくれた。ちゃんと、覚えていてくれた。それだけで嬉しく思う
カミナがいる。

好き勝手に喚き散らした言葉が、叫び倒した屁理屈が、確かに伝わ
った証拠だ。

と、カミナの意地悪にシキロは、

「あれだけ何度も名乗られると、嫌でも覚えるよ。後、届いたから」

「ん？」

やはり笑って、首を横に振った。

手を胸に当てて、

これまで失っていた分も含めた、とびっきりの笑顔を見せる。

「届かないはずだったものが、届いたよ、“ここ”に。カミナの声が、カミナの言葉が、カミナの、魂が」

「お前ら……」

言葉に誘われるように、シキロの後ろから、シナチ力村の無人達も集まっていた。

全員が笑って、ひたすら笑って、笑いを振り撒いて、

誰しもが、人形であることを、傀儡として在ることを、やめて。

彼らはもう、無人では、無い。

もう、誰かの為に要することは、しない。

要るのであれば、それは自分達の為に。

誰に構うことはない。一生に一度しかない自分達の人生を、自分の好きに、生き抜いていく。

それを教えてくれた、シナチ力村の人達を上回る、空前絶後のお馬鹿さんのように。

「ありがとう、カミナ」

村を代表して、シキロが感謝の意を口にする。

皆が皆、新しい道を手に入れた喜びに溢れながら。

心残りだった思いを、遺っていた末期の想いを、解消させながら。

最期に一言だけ添えて、

ありがとう、僕達を必要としてくれて。僕達を、否定してくれて。
これでようやく、

《終われる》よ

…。

………
“消えた”。

「え？」

シキロも、シナチカ村の人達も、一人残らず全員、

まるで霧か霞が晴れるかの如く、今の今まで誰も居なかったかのよう
うに、

消えた。

カミナの目には、陽が傾いて赤焼ける景色だけが写るのみ。

目を何度瞬いても、消えたものが視界に戻ってくることはない。

下でダシャーがそそくさと逃げるのも放りっぱなしで、呆然啞然と
するカミナ。そこへ、

「アニキ〜!」

「…シモン」

グレンラガンから降りて駆けしてきたシモンが、謎の答えを運んでくれた。

「丁度良かった。お前も見てたよな？ 今、」

「アニキ……………」

「一体、誰と話してたの？」

「……」

一体、誰と話してたの？

それは、

その質問の意味するところは、

「まさか…」

シモンには、“彼ら”が見えていなかったといふことで、

つまり、

「嘘だろ……あいつら、まさか……！」

導き出される答えは

！

「あいつら……ッ、透明人間だったのかア

ッ
ッ
ッ！？！」

なんでそうなるのかなあ。

え？（後書き）

さすがは俺様、名推理だ！！

あばよ!! (前書き)

ああ! ? 俺の肉が逃げてる!!

あばよ!!

夜になり。

シナチ力村の人は透明人間だった！ というのが、カミナの結論だったのだ。

そんな大馬鹿さんに異を唱えるのは、グレン団メンバーの永遠なる運命さだめなのだろうね。

「やっぱり……アレ、なのかな？」

深刻そうに、恐々とシモンは尋ねる。

「あ、アレって！？ シモン、滅多なこと言っちゃ駄目よ！ そういう話をする、返って集まってくるって聞いたことが……」

すっかり青ざめ、気が動転したヨーコが、シートと人差し指を口に当てて、

「お二人共、落ち着いて下さい。幽霊なんている訳」

「ハッキリ言わないでえ

！！！」

残念ながら配慮の足らなかったロシウに、二人の癪癢が爆発。

端から面白半分で眺めていたリーロンも、これには呆れるしかなかった。

「幽霊なんている訳ないでしょう？ 理論的に考えなさい、理論的に」

「何か、判ったんですか？」

ロシウは隅っこで縮こまるお子様を気遣い、幽霊説を覆せる証言を求める。

先程からまた機械を弄っていたリーロンなら、とつくに原因を究明しているに違いない。そして、

「この辺一帯、不思議な磁場が形成されているわ。多分それが、幽霊の正体」

その読みは正しく、縮こまっていたシモンとヨーコにも笑みが、

「…ただ、この磁場のエネルギーがなんなのか調べてみたんだけど、どうもガンメンの動力と酷似しているのよね」

笑みが、

「ガンメンの動力、ですか？」

「そう、ガンメンを動かすには気合いが必要でしょ。非科学的も良いところだけど、もしその気合いが人の心、想う力だとしたら……」

笑みが、リーロンの含みある言葉で凍りつき、

「この不思議な磁場は、ここで亡くなった人達の怨念………か・も・知れないわねえ？」

怨念。

それ、即ち。

呪……、

「「ッッッ嫌アアアアアアアア！……」」

リーロンのいやらしい言い方を境に、二人が堰を切って泣き叫んだ。

幽霊はいないと言って欲しかったロシウの期待を、ものの見事に裏切ったよこの人は。

「り、リーロンさん……」

「ウッフ　だって、二人の怖がる姿が可愛かったんですもの」

反省も、していなかった。

ところでカミナとギミダリは、

「ムシャムシャ……むう、ほこはがひてもひやはらねえ！　やられひはったやふもひれいはり……ゴクンツ、だ！　墓作りくら

い手伝つてやりたかったのによお、あいつら、実はかなりの照れ屋だったのかもな？」

またしても獲物に逃げられたので、グレンハウスに貯蔵してあった乾燥骨付き肉を代わりとして頬張りながら、

「すっからか〜ん！」

「待って〜…」

探険ごつこと称してついでにきた双子と一緒に、シナチ力村の様子を見に行っていた。

因みに頬張っていた時の台詞を翻訳すると、

「むう、何処探してもいやがらねえ。殺られちゃった奴もキレイサッパリだ！」

となる。

結局収穫が得られなかった三人は、満天の星空の下を帰宅。ロシウにお帰りなさいと出迎えられ、

「やっと帰ってきてくれました。さあ、傷の手当てをしましょう?」

「ああん? こんなもん、唾つけときゃ治るよ。なんたって俺は! 絶対無敵のカミナ様だからな!!」

「敵にやられかけてたのは何処のどいつよ……」

「破傷風になっても知らないわよ」

「刃掌、封? なんだ、ちよっぴりカッコいいじゃねえか。是非ともなつてやろうじゃあねえのオ!??」

「馬鹿だ……」

献身的な申し入れを、お間抜け回答で無下にしたり。

いつも通りの日常風景に戻ったところで、シモンとヨーコの弱腰コンビが、声を揃えて直訴する。

「早くここから離れよう／ましよう……!!」

「えー？ 俺もつくたただしよ、グレン動かしたくねえ」

「だったらグレンラガンのままで俺が動かすよ！ いくらでも気合を入れるよ……!」

「ねえ、私もしばらくここに残って磁場を調べたいわ。今後必ず役

に立ちそつじゃない」

「駄目ー！ 駄目なものは駄目なのよ！！ リーロンだけ置いてっ
ちやうわよ！？」

難色を示すカミナとリーロンを押さえつけて、有無を言わせず出立
決定。

渋々ながらも折れるしかなかったカミナは、見納めとして、もう一
度だけシナチカ村の方角を向いた。

岩の陰で見えない洞穴を想像し、誰からも必要とされなかった、要
無しの村を思い浮かべて、

「…ま、あんだけ良いツラ出来るようになったんだ。もうとやかく
言わなくても大丈夫だろ」

消滅寸前の、皆の笑顔を思い出してフツと笑う。シナチカ村の透明

人間達は、シキロは、きつと二度と自分達は必要のない人間だ…なんてことは、言わないだろう。

カミナにしてやれることは、なくなった。

ならば、男は黙って彼の地を去るのみ。

別れの一言くらい交わしたかったが、隠れられたままでは叶わないし時間もないので、

自身を待つ仲間達へと、共に歩き出す。

その背中へ、

バイバイ、カミナ。

「
…」

「ギミー、ダリー、ハウスに入りなさい」

「…たくさん、いる」

「え？」

「みんな、てをふってる」

「バイバイって、わらってる」

「…、」

振り向いても、誰も、いなかった。

空耳だったのか、風の音を聞き違えたのか、

でもその声は、確かにカミナの耳に届いた。

幻聴だろうと、まやかしだろうと、

透明だろうと、幽霊だろうと。

あれは確実にシキロの声だと、少年の別れの挨拶を聴いたのだと、カミナはハッキリ決めつける。

だから、カミナも返すことにした。

束の間の交流、一時の邂逅に過ぎなくても、

彼らは彼処に存在した。カミナの前に、在ったのだ。

だから、応えた。

息を肺の中一杯に吸い込んで、

彼らに負けない、最強最高の笑顔で、

さよならを、言う。

「あばよ、シナチカ村！！ … あばよ、シロツケ！！ 次に出会った時は、旨い飯をたらふく用意しとけよオ！！！」

…。

「……………カミナア
に?!」

!?? 誰に話しかけてんのよ! 誰

「アニキ、気をしっかり持って!!」

「バイバイ!」

「バイバイ」

「ギミーとダリーまで…」

「アニキのせいだ……アニキのせいでギミーとダリーが呪われた！」

「憑くならアイツに取り憑いてよお！　こんな幼い子を呪うなんて……」
「……」

「……ッッッ」

「リーロンさん、笑ってないで止めるのに協力して下さい」

「そつだロシウ！　ロシウも悪い！」

「え……ええ！？　僕ですか……！？」

「化けて出るって言ったじゃん！」

「言いましたけど、本気で言った訳では……」

「そういえば、ロシウが冗談を言うなんて珍しい話よねえ。……こつちも呪われていたりして、ねえ？」

「「……口オオシイウウウ
ツツ！

「だあもう！！
ツツツ！！！！」

つか、オメエーらウルツツセエ

「アンタには負けるわよ」

「アニキには勝てないよ」

「カミナさんの方が、大きいです」

「以つ下同文」

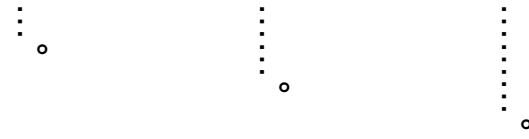
「いつかどーぶ〜ん！」

「ぶん」

「ぶみ！」

「オオ……お前らな……ッッ」

「……ッ、……！？……！！！！」



《次に会った時は、か》

《それはちょっと、無理なんだけどね》

《僕達は、もうシんでるから》

《もうすぐ、本当に消えるから》

《けど、だけれどね、カミナ》

《なんでかな……カミナなら、また会えるような気がするよ》

《たとえシんでも、肉体は無くなっても》

《カミナは、それすらどうにかしてしまっ、そんな気がする》

《不撓不屈の、男だからね。だから》

《また、会おう》

《バイバイ、カミナ。また、逢おうね》

あばよ!! (後書き)

まだまだ続くぞコノヤロオ!!!

俺を誰だと思ってやがるっ！！！（前書き）

とくと見晒せエ！！！！

俺を誰だと思ってやがるう!!!

夜が明ける。

太陽が昇り、世界を跨ぎ、行き着いたなら、落ち沈み。

光が消えれば、また夜へ。

何度も、何度でも、繰り返される自然の摂理。

昇り沈む太陽が在る限り、それを展望する地球と生き物が在る限り。

無限に広がる大宇宙が在る限り、

《螺旋》の営みは、終わらない。

青空に浮かぶ灼熱の星が、見渡す限りの荒野の世界を、チリチリに焦がす時分。

草木もろくに生えない、黄土に濁った無味乾燥の大地の上で、

人っ子一人見当たらず、寂しくて心切なくなってくるそんな場所で、

『ヌウウウウウリヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア』

けたたましい雄叫びを上げながら、寂しさなんて何処吹く風で爆走する紅いガンメンの姿があった。

その名もズバリ、グレンラガン。

漢の魂背中に背負い、ついでにグレンハウスも背中に背負って、猪突猛进しながらに荒野を颯爽と駆け抜けていく。

エネルギーシユ溢れる豪快な走りは、誰にも止めることは出来ない。

誰にも、

「コオラア ツー！ 止まりなさいこの馬鹿カミナー！！ い
つまで走り続けるつもりよ！？」

グレンハウスに閉じ込められたヨーコでも、

「ちょっとカミナ！ グレンの方で調べたいことがあるって言うてるでしょ？！ とにかく一度止まりなさい！！」

通信機越しに直接訴えるリーロンでも、

「ここ数日、夜通し走りっぱなしです。食事も取っていませんし、それに、僕、もう限か……」

船酔いでフラフラロシウは勿論のこと、

「おゝ、そとがビュンビュンとんでくゝ！！」

「はーい」

まったくギミーとダリーは論外で、

『だ、駄目だ………グレンのコントロールを奪えない。アニキ、止まってくれよお……!』

「ぶいぶい!! ぶうぶぶ、ぶいい!？」

頼みの綱のシモン・ブータすら、ラガンの中でお手上げ。

気苦勞絶えないグレン団メンバーその全員が、決死の説得を行う中、

馬鹿の一つ覚えでグレンラガンを走らせる、前人未踏の超馬鹿リィダーは。

『いつまで走り続けるかってエ!? んなもん決まってるだろオ!』

！ 地平線の果てまでだアッ！！！！」

「一生辿り着けないわよこのお馬鹿
ツッ！！！！」

『調べたきや調べなあ！！ ただアし、俺ア今忙しいから、そっから頑張つて調べるオ！！！！』

「それが出来ないから頼んでるでしょ！！？」

『デコ助エ、心配してくれてありがとよ！！ けどな、食料はグレ^ンにたんまり積んどいたから、ノオープロブレイムツツツ』

「そ、そです、か。それは、良かった………パタリ」

『スイ モオン！！！！ 諦めんじゃねえ！！ 漢なら、果てないユートピアを目エ指すンドウアアアアアアアッツツ！！？』

「意味判んないよオオオオオ!!」

「ぶいいいいいいいい??!!」

…。

と、まあ、そんな具合で。

グレン団メンバーが迷子になったことで、旅の足が停滞

「迷子になったのはカミナの方!!!!」

噛みつかないで。

…旅の足が停滞し、遅れを取り戻そうと躍起になってダッシュして

いる、という光景なのですが。

絶え間なく揺さぶられること数日間。仲間達は止まってくれと懇願するも、カミナは依然として走り行く。

止まれば死んでしまう魚のように、

爽快な汗を流しながら、明日へ向かって突き進む。

そもそもこの男の辞書に、『立ち止まる』という文字はないのだ。

一時停止も、機能停止も、完全停止も有り得ない。

肉体が朽ち滅びようと、その信念が亡びることは、決してない。

脈々と、受け継がれていく。

幽霊の村が存在した証が、カミナの心に残るように。

カミナの遺志も、後世に受け継がれていく。

立ち止まったりしない。挫折もない。転んで倒れたなら、また起き上がれば良い。

それが、この男だ。

無茶で無謀で無鉄砲、滅茶苦茶ながらに向こう見ず　しかし、決める時は決めてくれる。疎んだ心を奮い起たせ、希望の炎を燃え上がらせる！

それがこの漢　　…、不撓不屈の、鬼リーダー！！

「おうよ、俺を誰だと思っていやがるう！！　いつでも何処でも全力前進、後退なんざ有り得ねえ！！　無茶を通して道理を蹴っ飛ばすウツ、不撓不屈のオ！　あ、鬼リーダー！………」

「……　グレン団のカミナ様たあ、オ俺のことだア
ツツツ！！！」

「「「……どうでも良いから、止まって
エエエツツ！？」」「」

……、

— 先ず、止まらないかい？

「却下！」

彼らの旅は、まだまだ続く…。

）
F i n
（

俺を誰だと思ってやがるう!!! (後書き)

あばよ、オメーら! また逢おうぜ!!

カットされるなあ、思わなかった…（前書き）

訴えられる！？ 上等だあ！！

カットされるたあ、思わなかった…

ここでは、諸事情により本作品から除外した会話や台詞なんかを書きたいと思います。

では、レッツラゴー。

テイク 1

カミナとダシャーの追いかけてこの会話。

「…喰らえッシャー！ スネイクバイトオ！！！！」

「く……………某奪還屋漫画から苦情がきそつな技名つけやがってッ」

…本当にきそつなので、NG。

てか、元ネタ知ってる人も少ないだろ。

テイク2

その二。

「アイアンテイル！！」

「ふん、効かねえなあ……任○堂に怒られそうな技なんぞ、効くかよー！」

本当に怒られそうなので、NG。

余談ですが、最近懐かしくなってプラチナ買いました。やっぱり良いな、ポケmo。

テイク3

カミナとシキロの出会いで。

「くう。俺の、肉……」

「……あの」

「んあ？」

「……女じゃ、ないのかあ………！」

ありきたりだし、萌えばかり詰め込んでねえ。てことで、NG。

つか、シキロに謝れ？

テイク4

カミナが迷子の頃、グレン団は。

「アニキ、見つからないね」

「見つからないわね、あの馬鹿は」

「もう、探すのやめましょうか？」

「賛成の人、手を挙げてー？」

「はい」

「はい」

「はい」

また本編に繋がらなくなるから、NG。

……それも一興か？

「不穏な動きを見せてんじゃねえよ」

メンゴ、メンゴ。

テイク5

潰れた村が健在という設定で、本気で出そうと画策しました。

「あゝ、我が村へ何しに来ましたかあ？」

「な……シャク村長！？　なんでテメーがここに！！」

「誰だ、それは？　ワシの名は『シャクモキド』だが」

「……気に入らねえ」

「奇遇だな、ワシもどうもお前が好かん」

因縁の対決、再び？　でも無駄に話が長くなりそうだったので、
G。N

しておけば良かったと、後で後悔。

テイク 6

あれ、ブータがないよ？

「ダメだあ、シロツケ達何処にもいやがらねえ」

「あ、アニキお帰り。お腹は膨れた？」

「おお、チビウシノクビ喰ったから、もうひもじくはねえよ」

「そっか。それじゃ、出てきて良いぞ、ブータ」

「ぶみ」

「？ いつも思ってたんだがよ、なんで俺が腹ア空かせつと、ブータ隠すんだ？」

「それは……………色々、あるんだよ。色々！」

「ぶ……………ぶいぶい、ぶぶいぶ！…！？」

「なんでそんな必死なんだ？」

仲間を一人（一匹）喪う危険性があるからです。てな訳でもないですが、NG。

カットした理由については、予定より話の尺が長くなり、短縮を図った為。

以上、カットした六つでした。他にもまだありますが、微々たるもののなので割愛させていただきます。

カットされるたあ、思わなかった…（後書き）

アノ肉が食べたい…。

日記書くたあ、ナマイキな!! (前書き)

久しぶりに読み返そうかシャ。

日記書くたあ、ナマイキな！！

月×日 晴れ

本日より、王都テツペリンよりチミルフ様の元に配属されることになった。まだまだ駆け出したが、頑張つて人間共を掃除して、一人前になるう。目指すは部隊長クラスだ！

月 日 晴れ

今日はチミルフ様と非番の者達とで狩りに出掛けた。俺もなかなかの量を仕留めたが、一番数が多かったのはヴィラル様だ。チミルフ様にも褒められて、悔しかった。次は負けない。

狩りを終えたらそのままキャンプ、仕留めた獲物でバーベキューだ。トビタヌキのステーキは絶品。チミルフ様は部下に優しい、ここに配属されて良かったとつくづく思う。これがアディーネ様とシトマンドラ様なら…。

月 日 晴れ

季節も移り変わり、冬が来た。蛇の身としてはキツイのだが、そんなことを吹き飛ばす嬉しい出来事があった。なんと、人間掃討数が好成績だということで、専用ガンメンを与えて貰ったのだ！

チミルフ様にも『この調子なら、部隊長昇進も早いぞ』と太鼓判を押して貰った。喜びのあまり飛び跳ねて転けて、壁に頭をぶつけた。

痛みは気にならなかった。

月 日 曇りのち雨

本日、新たに掃討担当区域の変更手続きが行われた。なんでも、そこを担当する奴がノイローゼになったとかで、代わりに最近好評価を受けて調子の良い俺に任せたいと、チミルフ様直々にご指名されてきた。

これを断る理由はないと、すぐ返事を出した。前の担当者がなんでノイローゼになったのかは、本人が喋らないので判らなかったが、そこを俺が制圧してみせれば、部隊長昇進は確実だ。この日の夜は、興奮して寝つけないぜ！

月×日 晴れ

本日、新しい担当区域に出向いて人間達を掃除してきた。

地上にあった村は一つ、他には地下が崩れて潰れた村を二つ見つけた。報告書にもあった、前担当者が潰したに違いない。おのれ、獲物が減った。

見つけた村は小さく、住んでいる人間もそんなに数はいなかった。掃除するのに時間も掛からなくて拍子抜けした。前の奴はどうしてノイローゼになったのか？

一つだけ気になったのは、その村の人間は誰も逃げず、抵抗もしなかったことだが、その分樂が出来たので良しとする。

月 日 曇り

新たに村が出来たと報告が入り、向かった。そこは以前殲滅した村があつた場所で、誰一人齒向かつて来なかつたことで覚えていた。あそこには他にも地下の村があつたのか、とにかく点数稼ぎに潰そうと行つてみたら、

月×日

月 日

月 日

×月 ×日

×月 ×日 晴れ

久しぶりに日記を書こうと思う。今日起こったことを未来永劫忘れぬ為に、ここに刻むことにする。

本日も、もう何度目になるのか、件の村の殲滅に向かった。何度潰しても、次には元通りになる、気味の悪い村だ。

今回はその原因を探る為、村人の一人を捕まえようとした。死人みたいに抵抗しないのでまた気持ち悪かったが、背に腹は変えられない。こんな日がこれ以上続いたら、俺までノイローゼになってしまう。その時、

悪魔がやってきた。『カミナ』と名乗る悪魔が。いきなり後ろから俺に覆い被さつて、左の二の腕を、食

\$
£ ¥ @ *

¢

%
#

落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け
落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け
落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着

村人を捕まえるのは、失敗した。

仕方なく、いつも通り攻めることにした。繰り返しになると判っていても、そうする他になく、

そうしたら、また、アイツ

ダイガンザンへかえると、さっそくチミルフさまのところへいった。
すいませんと。ひとことあやまつててっぺりんによドウさせてもら
っ、

月 日 晴れ

テッペリンに異動し、グアーム様の下で働くようになってから数週間後。

『悪魔』率いるグレン団とダイガンザンが激突、チミルフ様が敗れたとの一報が舞い込んだ。

四天王の一角が墜ちたことで、他の四天王の方々も螺旋王様に呼び出された。グレン団を駆逐すべく、動き出すらしい。

それより重大なのは、チミルフ様が亡くなられたということだ。ダイガンザンを去る前、チミルフ様は自分の壊された専用ガンメンを新たに与えて下さり、良く頑張ったと労ってくれた。まさか、それが形見の品になるなんて…。

部下思いのチミルフ様の仇を取ろうと、ヴィラル様も含め、皆躍起になっている。俺もチミルフ様にはお世話に、それ以上にご迷惑をお掛けしたし、弔い合戦に参加したかったのだが

俺は、悪魔の影に打ち勝てぬ自分を、呪った。

すみません、チミルフ様。

月×日 晴れ

昔が懐かしい。数年前のこの日は、まだ村の悪夢に悩むことも、『悪魔』に日々恐れることも知らなかった。

嗚呼、懐かしい。

月 日 曇り

アディーネ様が撃退されてから数日後、代わってグアーム様がグレン団討伐に向かわれた。俺は、

風邪を引いたと嘘をついて、テッペリンの護衛として残った。

月 日 晴れ

アディーネ様が亡くなりました。

チミルフ様と仲が良く、誰よりチミルフ様の死を嘆いていたあの方が、『悪魔』に殺されてしまった。

普段性格がキツく、部下を苛めるのが趣味で嫌われがちだったアディーネ様。それでもチミルフ様を想い、敵討ちにグレン団へと立ち向かわれた。

胸が痛くなった。アディーネ様に比べ、自分はどうか？ 『悪魔』

が恐ろしくて王都を出られない我が身が恨めしい。

ほんの一握り、俺にも勇気があれば。

月 日 晴れ

シトマンドラ様がご出陣なされた。空戦隊による爆撃でグレン団を追いつめたらしいが、なんとヴィラル様の妨害でダイガンテンが故障、トビダマも一つ奪われてしまったらしい。

チミルフ様とアディーネ様、お二方の為に戦っていたヴィラル様が、何故そんなことをしたのか、判らない。

そしてついに、グレン団が王都テッペリンに攻め込んでくる。今まで逃げていた俺に、もう逃げ場はない。戦わねば、いけない。決心しなければ。

月 日

来た。来た。来た来た来た来た来た来た、悪魔がグレンが攻めていかないとシトマンドラが飛んで駄目だかんどねわ急がいややこんな恐て書いてむ場合

月 日 晴れ

あれから何日経っただろうか。

大グレン団（名前いつの間にか変わってた）の侵攻によるテッペリ
ン防衛戦は、大グレン団の勝利に終わった。

シトマンドラ様も、グアーム様も、螺旋王様すらもグレンラガンに
敗れ、地上は人間達のものになってしまった。

それより俺にとって衝撃だったのは、『悪魔』カミナが死んでいた
ということ。

チミルフ様との戦いの後、すぐに亡くなったという。

逃げなくても、良かった。

人間達が新たに立ち上げた新政府につくことは勿論、敵前逃亡した
ために反政府勢力、獣人残党軍にも入ることが出来ない。何処にも、
俺の居場所はなくなってしまった。

この日記も、今日限りで書くのをやめにしよう。ならず者として生
きなればならない俺に、日記を書き続けるのは辛いだけだ。機
会があれば、何処かへ捨てよう。

これで、終わりにする。

く
・
く
・
く
・
く
・
く
・
く

「……ぐずっ、ヒッ……何度……読み返しても……泣けるシャ」

「あ？ 何泣いてんだ、お前」

「うん、ちょっと日記読み返して………うわぁ?! な、なんだシヤ、ガメルか。驚かすシヤ……」

「まゝた例の悪魔って奴と間違えたのかよ」

「あゝ、似てんのは格好だけだシヤ。お前はアレほど怖くはないシヤア。んで、なんの用ッシヤ」

「おお、襲うのに手頃なところを見つけたぞ。コレハナ島って離れ小島だ。カミナシテイからかなり離れてるから、政府のアホ共もいねえ。そこで食糧をたんまり奪って、月が落ちてきても大丈夫な場所に隠れるぞ」

「そつだシヤゝ、シエルターに行けば犯罪者でとっ捕まるし。それならさっさと……ウヒイ!？」

「ん？　なんだよ」

「な……なんでもないシヤ。先、行つてくれッシヤア……」

「変な野郎だな。ま、いいわ。はよ来いよ」

「……………昔噛まれた古傷が疼くなんて、不吉シャ……………なんか、嫌な予感がするシャ」。大丈夫かシャ……………」

「急げよー！」

「わあかってるツシャ！！　　ったく、人の気も知らんで……………」

「あーあ、何処まで落ちぶれりやあ良いんだかシャ……………ならず者として生きるのにも疲れたシャ。かといって、月に押し潰されてあの世に逝くのもシャ、嫌だし……………」

「
…」

「…もし。もし、あの悪魔が生きていたら、」

「あの月、どーにか出来たんかシャア？ 不撓不屈の鬼リーダー、」

「あの、カミナなら」

}
F
i
n
}

日記書きたあ、ナマイキな！！（後書き）

くコレハナ島襲撃後く

「シャハハッ、予感が的中したシャ……………」

「畜生…あんな女に負けるなんて……………」

「「これぞまさしく、やぶ蛇。ガクリ」「」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5779f/>

天元突破グレンラガン番外編 第5．55話「前を向いて生きやがれ！」

2010年10月9日13時30分発行